

GTECシリーズのご紹介

	GTEC for STUDENTS	GTEC CBT
測定技能	4技能 LISTENING、READING WRITING ※Speakingはオプション受験	4技能 LISTENING、READING SPEAKING、WRITING
受験形式	学校単位で受験	個人受験(公開会場)
実施形態	紙、タブレットでの実施	コンピュータでの実施
所要時間	約90分 ※Advanced、Basicタイプの場合	約175分 コンピュータでの実施のため 個人により差があります
スコア上限 (各技能合計)	810 ※Advancedタイプの場合	1400
出題	日常生活での英語の使用を 想定した出題	日常生活に加え英語を用いた 学習場面を想定したアカデ ミックな素材も含めた出題
返却物	スコアレポート(個人成績票)、 教師用帳票 (付属学習教材: STEP UP ノート)	スコアレポート

2016年度 CTEC CBT検定日(予定)

- 第1回: 2016年7月17日(日)
 - 第2回: 2016年11月20日(日)
 - 第3回: 2017年3月26日(日)
- ※年度内2回まで受験可能です。

お問い合わせ

0120-350455 (通話料無料)

●先生方からのお問い合わせは、上記ダイヤルにて承ります。
受付時間/月~金 8:00~19:00 土 8:00~17:00(祝日、年末・年始を除く)
株式会社ベネッセコーポレーション 岡山本社 〒700-8686 岡山県岡山市北区南方3-7-17

先進的な取り組みから学ぶ 英語4技能 指導事例集

Listening

Reading

Writing

Speaking

Message

現行の学習指導要領では
小中高を通じて、コミュニケーション能力を育成し、
「聞く」「話す」「読む」「書く」の4技能を
バランスよく育成することが求められています。

本書では、先進的な指導に取り組んでいる
全国6つの事例を紹介しています。

日々、新しい指導法の導入や授業方法の改善に
取り組まれている先生方の一助になれば幸いです。

Contents

Part1

- 1 英語の4技能指導が求められる背景
- 2 中高生の英語学習に対する意識から見る
グローバル社会で求められる英語力
- 5 改革の波が訪れる！
英語教育の変化に関する3つのトピックス

Part2

- 7 全国の4技能指導実践例のご紹介
- 8 ー大分県立大分上野丘高等学校ー
- 12 ー熊本県立八代中学校・高等学校ー
- 16 ー長崎県立長崎西高等学校ー
- 19 ー石川県七尾市ー
- 24 ー猪苗代町立東中学校ー
- 28 ー福井県教育委員会ー
- 32 GTECのご紹介
GTECは英語教育の現場の課題を解決するスコア型英語テストです
- 34 ・GTEC for STUDENTS
- 38 ・GTEC CBT
- 40 GTEC CBT を入試で活用している大学一覧

Part1

英語の4技能 指導が求められる背景

昨今、小・中・高校から大学のどの段階においても
英語4技能を高める教育が求められています。

このパートではいくつかのデータを紐解きながら
4技能のバランスが取れた育成が必要とされる背景を
あらためてご紹介します。



中高生の英語学習に対する意識から見る グローバル社会で 求められる英語力



2014年3月、ベネッセ総合教育研究所が全国の中学1年生～高校3年生の約6000人を対象に英語学習に関する実態調査を実施しました。このデータから見てくる中高生の英語への意識を紹介し、中高生の未来につながる英語力を探っていきます。

※P2～4のデータは「中高生の英語学習に関する実態調査2014」（実施：ベネッセ教育総合研究所）の結果に基づくものです。

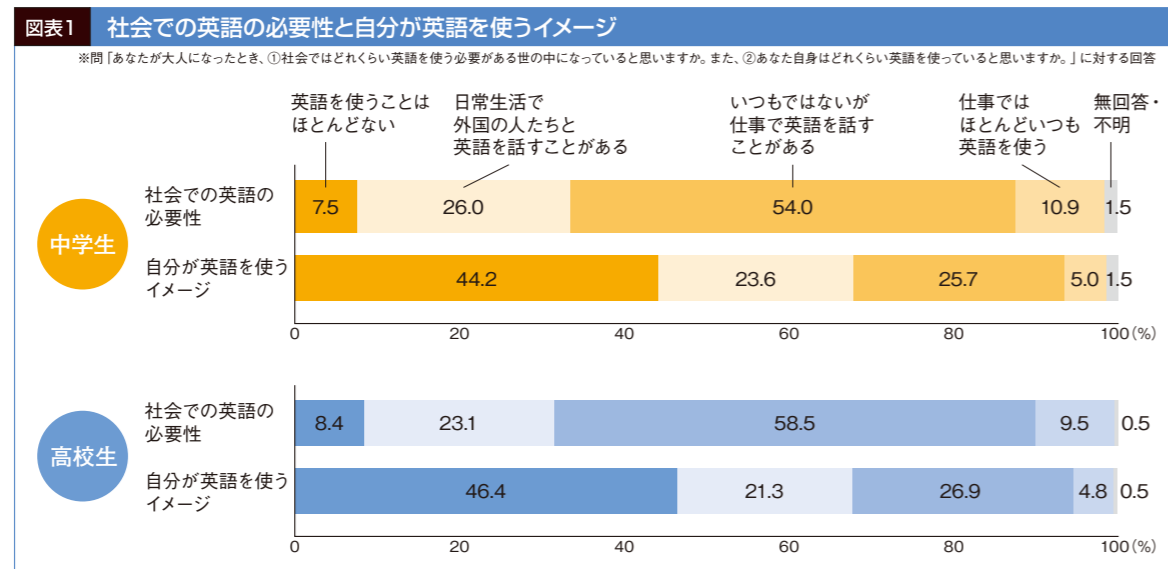
中高生の意識 1

英語の必要性は認識していても、 自分が使うイメージが低い

「将来の社会で英語が必要」=約9割 「自分が英語を使うことはない」=半数近く

中高生に「将来の社会での英語の必要性」を聞くと、約9割（中学生90.9%、高校生91.1%）が、何らかの形で英語が必要だと回答しています。一方で、自分が英語を使うイメージについて聞いたところ、半数近い中高生が「英語を使うことはほとんどない」と答えています（中学生44.2%、高校生

46.4%）。このデータからは、英語の必要性は認識していても、将来、自分が英語を使うイメージが低いという傾向がうかがえます。将来、いろいろな場面で英語の必要性が高まることを生徒にイメージさせることがポイントといえるでしょう。



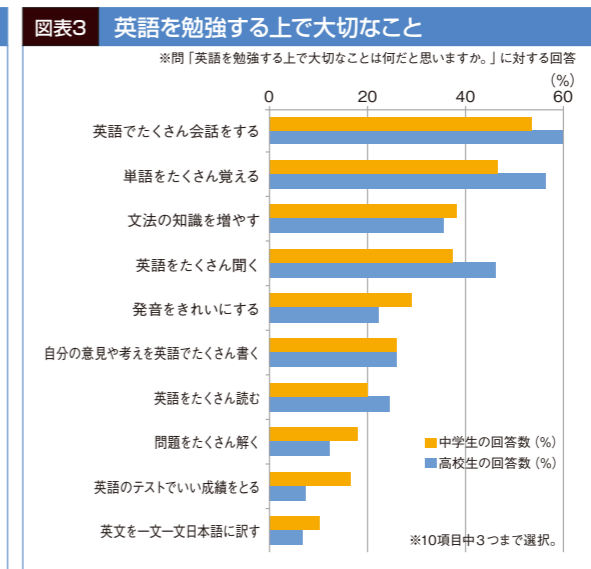
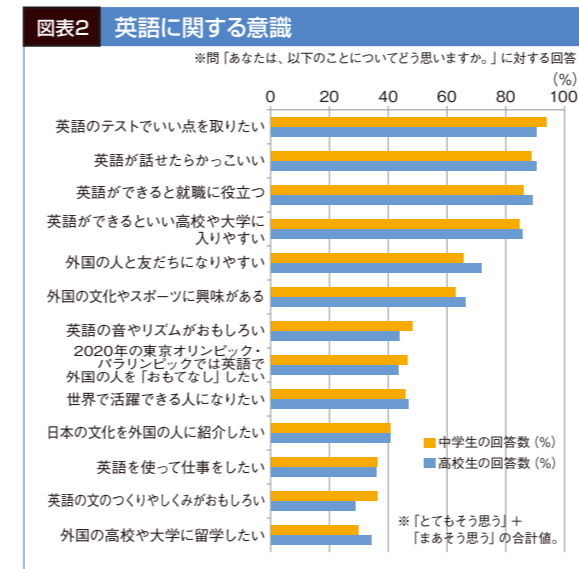
中高生の意識 2

英語を話すことへの憧れや必要性は 強く感じている

「英語を話せたらカッコいい」=約9割 「英語でたくさん話をするのが大切」=半数以上

英語に関する意識調査では、約9割の中高生が「英語が話せたらカッコいい」と感じています。また、英語の学習で大切なことについては、「英語でたくさん話をするのが大切」が最も高くなっています。高校生が英語で話すことの重要性を認識し、話せることへ憧れを持っていることがわかります。

文部科学省が実施した「高等学校等における国際交流等の状況調査」の結果によると、高校生の海外留学が増加に転じたことがわかりました。一方で留学を希望しない生徒にその理由を聞くと「言葉の壁」がトップ。若者の内向き志向を変えるためにも、英語で話す力の育成が求められます。



改革の波が訪れる!

英語教育の変化に関する 3つのトピックス

グローバル化に対応するために、
小中高と大学を通じた教育環境の整備が進められています。
この記事では小学校、中学校と大学の変化を中心に、
近年の英語教育環境の変化を紹介します。

1 大学の英語教育

スーパーグローバル大学を中心に、大学のグローバル化が加速

文部科学省は2014年、大学の国際競争力を高めるために重点的に財政支援する「スーパーグローバル大学 (SGU)」に、37校の国公立大を選びました。SGUは2023年度までに「外国語に授業科目数」と「日本人学生の留学経験者」を大きく増やす計画を立てています (図表1、2)。

それに加えて、多くのSGUは学生の語学レベルの目標をTOEFLiBT80程度に設定し、その割合を高めようとしています (図表3)。今後は多くの大学がグローバル化を加速させ、高校生は大学入学後に高い4技能の英語力を求められるのは間違いありません。

[図表1] 外国語による授業科目 (SGU合計)

年度	2013年度	2023年度目標
人数	19,860科目	52,766科目
比率	16.5%	34.3%

※学部・大学院の合計

[図表2] 日本人学生の留学経験者数 (SGU合計)

年度	2013年度	2023年度目標
人数	17,505人	69,803人
比率	5.0%	17.0%

※学部・大学院の合計

[図表3] スーパーグローバル大学における語学力の目標値

大学名	基準	2013年度		2023年度	
		人数	割合 (%)	人数	割合 (%)
北海道大	TOEFLiBT80	837	7.2	5,840	50.0
東北大	TOEFLiBT80	460	4.1	2,475	22.0
筑波大	TOEFLiBT79	308	3.0	2,024	20.0
東京大	TOEFLiBT90	1,400	9.9	5,500	37.9
東京工業大	TOEFLiBT80	478	9.9	1,000	20.6
金沢大	TOEFLiBT80	32	0.3	7,489	68.2
京都大	TOEFLiBT80	20	0.1	6,920	50.0
大阪大	TOEFLiBT79	2,162	13.5	10,850	70.0
広島大	TOEFLiBT80	661	5.9	3,793	50.5

※学部・大学院の合計

※出典/各表は「スーパーグローバル大学構想調査」よりベネッセコーポレーションが集計

中高生の意識 3

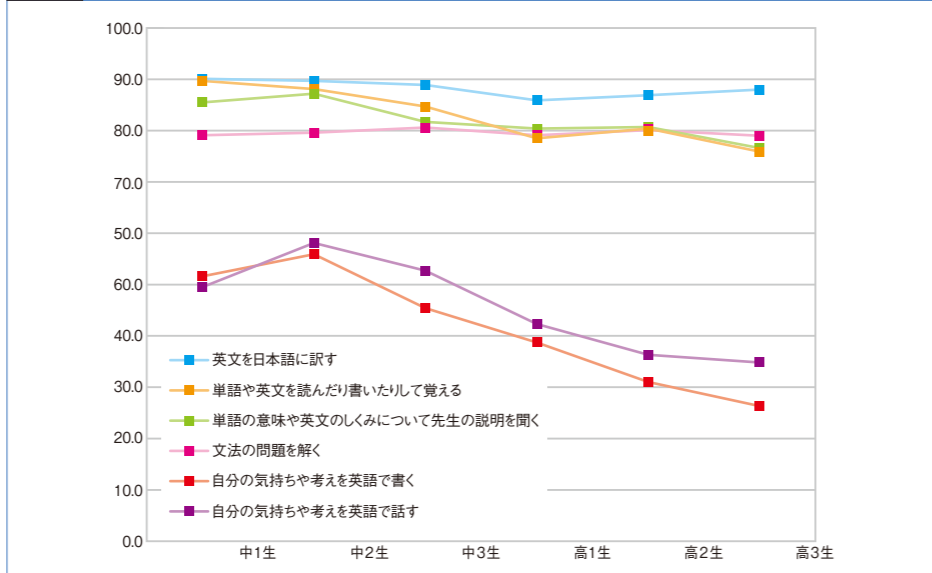
生徒は、授業が「和訳」「暗記」中心だと 考えている

自分の気持ちや考えを「書く」「話す」という活動が行われていると認識している生徒は中2をピークに減少

授業中の活動について、どの学年も「英語を日本語に訳す」「単語や英文を覚える」「先生の説明を聞く」「文法の問題を解く」が行われると認識している生徒が7割以上いる一方で、「自分の気持ちや考えを英語で書く、話す」という活動が行われてい

ると感じる生徒は中2をピークに減少しています。コミュニケーション能力の育成が重視されるなか、「話す」「書く」という活動を授業の中にどう取り入れるかが課題と言えそうです。

図表4 授業でしていること



これからの社会が求めるのは「多様な人と共生し、問題を解決できる人」。 「話す」「聞く」を含めた総合的な英語力が必要です。

近年、よく耳にする「グローバル人材」という言葉は、さまざまな定義がなされていますが、世界を舞台に活躍するグローバルリーダーをイメージするケースが一般的でしょう。そう解釈すると、「日本人が全員、グローバルリーダーにならなくても良いのでは？」という疑問が出てきます。

その一方で、「グローバル人材=多様な人たちと共生できる人材」という解釈もできます。人、モ

ノ、情報が地球規模で移動するグローバル社会では、異なる文化背景を持つ人とともに問題を解決し、新しい価値を生む力は、すべての人に求められる力となります。

特に、これから社会に出る若者は日常レベルでもビジネスの場でも、自分の考えを適切に伝えるため、「話す」「聞く」を含めた英語の4技能が求められることが予想されます。

2 大学入試の英語試験

大学入試に資格・検定試験の成績の活用が推奨される

近年、大学入試における多角的評価の観点から、学部等の特性に応じた資格・検定試験の活用が文部科学省により推奨されています。平成27年度の大学入学者選抜実施要項からは、語学に関して、4技能を測ることができる資格・検定試験を推奨

するとともに、国際バカロレアの資格や成績の活用も追記されました(図表4)。語学関連の資格・検定試験に関しては、これまでも推薦入試を中心に一部の大学で取り入れられてきましたが(図表5)、今後はこの流れが加速すると考えられます。

[図表4]平成27年度大学入学者選抜実施要項(一部抜粋)

- 4 資格・検定試験等の成績の活用
- (1) 入学志願者の能力・適性や学習の成果、活動歴等を多角的かつ客観的に評価する観点から、例えば、以下のとおり、学部等の特性及び必要に応じ信頼性の高い資格・検定試験等の活用を図ることが望ましい。
- ① 入学志願者の外国語におけるコミュニケーション能力を適切に評価する観点から、実用英語技能検定(英検)やTOEFL等、「聞く」「読む」「話す」「書く」の4技能を測ることのできる資格・検定試験等の結果を活用する。

[図表5]平成25年度大学入学者選抜における資格・検定試験(語学関連)の活用状況

区分	純計	推薦入試	AO入試	一般入試
国立	16 (19.5%)	10 (12.2%)	9 (11.0%)	0 (0.0%)
公立	18 (22.2%)	15 (18.5%)	8 (9.9%)	1 (1.2%)
私立	231 (40.0%)	181 (31.4%)	125 (21.7%)	33 (5.7%)
計	265 (35.8%)	206 (27.8%)	142 (19.2%)	34 (4.6%)

※下段は、それぞれの区分ごとの大学数(国立:82校、公立:81校、私立:577校、計:740校)に対する割合

※文部科学省資料より

3 小学校・中学校の英語教育

小中高を通して、“より高度な英語力の養成”が求められる

文部科学省は2014年に「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」を発表しました。この計画は2020年の全面実施をめざし、2014年度からの改革が推進されています。計画が実施されれば、小学校高学年(5、6年)では外国語(英語)が教

科化され、授業時数も週3コマ程度まで増加します。中学校では、授業を英語で行うことが基本となります。高校においては、授業を英語で行うとともに、発表や討論、交渉などを用いて言語活動を高度化させることが求められています。

Part2

全国の4技能指導実践例のご紹介

- ・大分県立大分上野丘高等学校(大分県) 8
- ・熊本県立八代中学・高等学校(熊本県)..... 12
- ・長崎県立長崎西高校(長崎県) 16
- ・石川県七尾市 19
- ・猪苗代町立東中学校(福島県) 24
- ・福井県教育委員会(福井県) 28

表現力を高めるため、アウトプットを重視 大学の先を見据えた英語力を養成する

大分県立大分上野丘高等学校

130年の伝統を誇るトップクラスの進学校

大分上野丘高等学校は、県内随一の歴史と伝統を誇る普通科高等学校。創立以来「質実剛健」の校風を堅持し、2015年には130周年を迎えた。また、同校の方針は文武両道であり、生徒は部活動に励みながら、2015年度入試において東京大学(9人)、京都大学(2人)、大阪大学(21人)、九州大学(67人)などの難関大に多く進学している。

同校はこれまでも、英語4技能を鍛える「ELT(English Language Training)インストラクション」という取り組みを行ってきたが、2014年度からはさらに生徒の表現力を養成する指導を導入した授業に着手。2015年度からは高1、2年生の全クラスで実施している。この取り組みの中心人物である佐野博紀教諭にお話を伺った。



佐野博紀教諭

オールイングリッシュの授業を通し 英語で自由に話せる素地を 高校時代に身につけさせる

——2014年度から、「コミュニケーション英語」の授業をオールイングリッシュで実施し、生徒のスピーキング能力と表現力の養成を図っているとお聞きしています。こうした授業を展開するに至った背景と狙いをお聞かせください。

佐野先生：グローバル化が進む社会を生きる生徒たちに、どの国の人が相手であれ、きちんとコミュニケーションを取れる英語力を身につけさせたいという思いがありました。英語で適切にコミュニケーションを取るには、「読む」「聞く」という能力だけでなく「話す」「書く」といった情報発信能力が必要です。

私たちもこれまでリーディングや自由英作文の指導を通して「話す」「書く」という能力を身につけてきましたが、それは決まった英文の音読であり、条件があるなかでの英作文にとどまっていた。こうした認識が、この取り組みをスタートさせた背景にあります。

また、個人的には、昨年(2014年)の夏、本校の卒業生と話をしたこともきっかけのひとつです。難関国立大に進学した生徒で、英語が苦手なタイプではありませんでしたが、大学で英語のスピーキングに苦勞していると話していました。英語によるプレゼンテーションを行なった際、その卒業生は英文を暗記して臨み、良い成績を取めたようですが、同等の成績を取めた同級生は、もっと楽に英語でプレゼンテーションができていたそうです。この話を聞いた時、「英語で話ができる素地を

高校在学中につくってあげなければならない」という思いを強くしました。

理想形は教員が介入せず、 生徒のみで議論が進行すること

——具体的な授業内容について、教えていただけますか？

佐野先生：オールイングリッシュの授業は2014年の2学期から、私が担当する2年生で試験的に実施し、2015年からは高1、2年生の全クラスで導入しています。授業の最初に文法の解説や新しい表現に関する注意点を日本語で解説することもあります。基本的には教員の説明、生徒間の対話はすべて英語です。

例えば1年生の授業であれば、教科書に載っている内容を生徒同士で英語を使って質問しあったり、教え合ったりします。教員は生徒の様子を見ながら会話が停滞したり、不具合が生じそうときだけ介入します。

一般的な教科書はペアワーク、ディスカッション、ディベートという順番で進みますが、本校ではペアワークの後にミニディベートをさせて、フリーディスカッションに進みます。

——ディスカッションより先にディベートに取り組みさせるのはどういう考えからですか？

佐野先生：ディベートは肯定側・否定側に分かれるので、生徒が会話における定形表現を学びやすいからです。また、ディベートは意見を事前にまとめることができます。一方でディスカッションは即興性が求められますから、ハードルが高い。そのために後半に配置しています。

また、授業は基本的に教員ひとりが担当します。グループディスカッションの場合、各グループにリーダー役の生徒を設定して進行するようにしています。そのリーダーを見ていれば、うまく進んでいるのか、停滞しているのが把握できます。また、英語力の高い生徒に発話のきっかけづくりを協力してもらうこともあります。生徒だけでディスカッションが進んでいく状態になるのが理想的だと考えています。

メンタルブロックを外すことにより 「英語を話しても大丈夫」という 雰囲気がクラスに生まれる

——普段、一緒に日常生活を送っているクラスメイトと英語で話すことに抵抗や恥ずかしさを感じる生徒はいないのでしょうか？

佐野先生：実際、そういう生徒もいます。ですから、最初に生徒のメンタルブロック(否定的に考えてしまう意識の壁)を外してあげる必要があります。

——どのようにしてメンタルブロックを外すのでしょうか？

佐野先生：最初に評価の基準を明確に伝えることが重要です。間違った表現がダメなのではなく、自ら英語を話そうとする態度を評価しているのだと生徒に理解してもらおう。それをきちんと伝えることで、クラス全体に「英語で話しても大丈夫だ」という雰囲気ができてきます。

加えて生徒が間違った時に改善点をきちんとフィードバックするように心がけています。次に同じ状況になった時に話せるようになることが重要です。

——元々、英語の成績が良い生徒が多いために、オールイングリッシュの授業を実施できるという背景はありますか？

佐野先生：入試は5教科の総合得点で合否を判定しますから、必ずしも英語が得意な生徒ばかりとは限りません。得意な生徒と不得意な生徒の差はあります。ただ、この授業形態をスタートさせてからは、英語に苦手意識を持っている生徒のほうも頑張って成績を伸ばしているというケースが見られました。取り組みを通して自信をつけたことが成績の向上につながったのかもしれない。

——英語で話さざるを得ない状況が、生徒を成長させたのでしょうか？

佐野先生：それもあると思いますが、高校生は元来、英語で話すことが好きなようです。最初の授業でアンケートを取ると、「英語の勉強が一番楽しいことは何ですか」という質問に対して、「音読」という回答がトップでした。この結果から、英文を声に出して読んだり、会話したりすることが嫌

いではないことがわかります。今は中学校でも英語活動があり、生徒はある程度、英語で話す授業形態に慣れています。教員が解説する座学中心の形態が高校の授業だと考える人もいるかもしれませんが、あながちそうではないのかもしれない。

スピーキングの成果測定はスコア型の外部テスト GTEC を活用

——スピーキングは、ほかの技能と比べて客観的な成果測定が難しい能力だと思います。評価はどのようにしているのでしょうか？

佐野先生：スコア型の外部テストが適していると思います。本校は2012年度から、3技能を測るGTEC for STUDENTSを生徒に受験させていますが、今年(2015年)からGTEC Speaking Testも導入しています。この結果を活用して、経年のデータ比較も行いたいと考えています。

また、ある程度の成果は定期考査でも把握できると思います。授業内で英語をスムーズに話せない生徒は、文法の知識が不十分というケースがよくあります。そういう意味では筆記試験でも一定の成果を把握できるでしょう。

「話す」能力を育むことは入試対策の基礎固めにつながる

——スピーキングは、ほかの技能と比べて客観的な成果測定が難しい能力だと思います。評価はどのようにしているのでしょうか？

佐野先生：今のところ、大学入試で重視されているのは読解力と作文能力だと思います。これは個人的な考えですが、英語4技能の中で、「話す」能力は、「読む」「書く」「聞く」よりも高い位置にあると考えています。「読む」「書く」「聞く」という能力が備わっていなければ、その場で「話す」ことは難しいでしょう。話す力を育成することは、必然的に語力、文法の知識、読解力などの全ての力をつけさせることであり、それらを総合的に伸ばす授業の構築をめざしています。高2が終わる段階で、生徒の英語力を最大限まで伸ばすことが

できれば、個別の受験対策は高3になってからでも遅くはないでしょう。

コアになる技能を鍛えておけば大学進学先のつながる英語力をさらに伸ばせる

——今後、グローバル化が進む社会に生きる若者にとって、必要となる力はどのようなものだとお考えですか？

佐野先生：多くの高校生はグローバル化をポジティブなものとして捉えていると思います。しかし、ネガティブな面もあると思います。例えば、異文化を背景に持つ人同士が意見を述べる時、そこに摩擦が起きることも考えられます。その場合、ただ黙っていてもいけませんし、相手がこちらを慮ってくれるかと思っていてもいけません。一定の距離感を保ちながらコミュニケーションを取ることが必要です。100%分かり合えなくても仕方ありませんが、相手を排除してはいけません。一定の距離をキープながらも適切なコミュニケーションを通じて相手とつながれる人が、グローバル人材をいえるのではないのでしょうか。そうなるためには、誰に対しても臆することなく話せる英語力は必要でしょう。

英語力に関して言えば、コアになる英語4技能をしっかりと鍛えておくことが大切です。この部分をきちんと持っていれば、テクニカルタームや専門的な英語力は、必要なレベルに応じて雪だるま式に身につけていくと思います。

今回の取り組みは一見、話すことのみを重視しているように受け取られるかもしれませんが、そうではありません。話すために必要なすべての能力を引き上げようとする取り組みです。生徒には大学入学の先につながる英語力をつけてもらいたいと考えています。明るい雰囲気の中で英語を話し、自発的に勉強していくようなしくみをつくるのは非常に難しく、かなりの準備が必要ですが、試行錯誤を重ねて、より良い授業を構築していきたいと考えています。

【図1】高1用の授業プリント(1)

Lesson 5 Part 2
●聴き取り (聴き取り)
●書き取り (書き取り)

Practice reading about (読解) 「読解」は「読解と読解」の付録の付録
●聴き取り (聴き取り) 「聴き取り」は「聴き取り」の付録の付録
●書き取り (書き取り) 「書き取り」は「書き取り」の付録の付録

【図2】高1用の復習プリント(1)

Lesson 5 Part 2
●読解 (読解)
●書き取り (書き取り)
●聴き取り (聴き取り)

【図3】高1用の授業プリント(2)

Lesson 5 Part 2
●聴き取り (聴き取り)
●読解 (読解)
●書き取り (書き取り)

【図4】高1用の復習プリント(2)

Lesson 5 Part 2
●読解 (読解)
●書き取り (書き取り)
●聴き取り (聴き取り)

中3、高1の授業に即興型ディベートを導入 生徒の総合的な英語力を養成する

熊本県立八代中学校・高等学校

中高6年を通じた英語力の強化を図る

熊本県立八代高等学校は2015年に創立120年目を迎える伝統校であり、九州大をはじめとする国公立への合格者を例年多数輩出する進学校である。2009年には中学校を新設し、中高一貫教育を開始した。“グローバル社会を生き抜く人材の育成”を目指し、英語指導を強化。2015年度から中3、高1の授業に「即興型英語ディベート」を導入し、生徒の英語力強化を図っている。同校の山本朝昭校長、進路指導主事の高木教諭、高1の英語を担当する芝教諭と楠山教諭、中3を担当する松岡教諭に話を伺い、取り組みをスタートさせた背景とその成果、今後に向けた課題を紹介する。



左から松岡教諭、芝教諭、楠山教諭、高木教諭

スピーキングのみならず 論理的な思考力や コミュニケーション能力の向上を期待

八代中学・高等学校が授業に即興型英語ディベートを取り入れたのは、今年度から赴任した山本校長の発案によるものだ。山本校長は以前から、英語を使った発信力のほかに論理的思考力やコミュニケーション能力を伸ばせるという観点から、即興型英語ディベートに着目していた。また、都市部と比べて地方の中高校生は英語で発言する機会が少ないことを懸念し、そうした場を設けようと考えていた。一方で、英語科の教員側も従来型の訳読、文法解説が中心の授業はこれからの社会で求められる英語力に対応できなくなりつつあるという認識を持っていたという。そこで即興型英語ディベートの実践活動を行っている大阪府立大学の中川智皓助教に協力を依頼し、6月から高1の1クラスに試験的にディベートを導入、9月からは中3、高1の全クラスでの実施をスタートさせた。

生徒全員が参加する チーム形式の即興型ディベート

八代中学・高等学校で実施している即興型英語ディベートは、世界で活用されているディベート形式の1つ、「パラメンタリーディベート」をベースにしているものだ。ある議題（モーション）に対し、肯定チームと否定チームに分かれ、英語で主張を行い、第三者（ジャッジ）を説得する形式となっている。

同校の授業では、議題をその場で発表し、生徒

が15分でチームの主張を2点まとめる（アイデアメイキング）。肯定チームの第1スピーカーが議題の定義と1つめの主張を英語で発表し、対する否定チームの第1スピーカーが相手の主張に対する反論と自チームの1つめの主張を述べる。引き続き第2、第3スピーカーがそれぞれの反論と主張を重ね、最後にジャッジ役が双方の主張の優劣を判断するという流れになる。

同校では、クラス40人を4人1グループに分けて10グループづくり、5組の対戦を授業内で同時に行っている。ディベートに参加するチームはグループ内の3人で構成し、残った1人は司会役もしくはジャッジ役を担当する。そのため、全員が英語で発言する機会が持てるようになっている。中3、高1とも、ディベートの形式は同様で、異なるのは、議題と語いのレベルだけだという。

先行導入したクラスを担当した芝教諭は「ディベートのルールと話者の役割、発言のフォーマットがあらかじめ決まっているため、抵抗を感じる生徒は少なかったように思います」と振り返る。しかし、第2スピーカー、第3スピーカーの生徒はその場で相手の主張を聞き、反論を考えなければならないため、初回の授業では即座にリアクションできないこともあったそうだ。3回、4回と授業を重ねるうちに生徒が徐々にディベートに慣れ、英語は拙いながらも自分の意図や考えを積極的に示そうという姿勢が見られるようになってきたという。

「本来、会話というものはその場で自分の考えを伝えるコミュニケーション。即興で話さざるをえない状況を用意することは、実践的なトレーニングになると思います」（芝教諭）。

英語力の成果検証には GTECなどの外部検定を活用

ディベートを経験した生徒はどのように変化したのか。授業を担当した教員に感想を聞いた。中3の授業を担当した松岡教諭は言う。「中1、2段階では主に定形のダイアログやスキットを活用して言語活動を行います。中3の生徒にとってディベートは初めての体験。暗記したダイアログは口に出せる生徒でも、その場で考えて英語を話すこ

とはなかなかできず、良い意味でショックを受けていました。目の前の話者の話をきちんと聞こうとするリスニング態度の向上やモチベーションのアップが見られるようになりました」。

高1の授業を担当した楠山教諭はメンタル面でも良い影響があるのではないかと話す。「今の生徒は失敗を恐れる傾向があります。しかし、高1のうちにたくさん失敗をしたほうが、後々それが活かされるのではないのでしょうか。『うまく英語が話せなかった』という悔しい思いが、その後の学習意欲につながるのではないかと考えます」。

その他にも「生徒同士のチームワークが上がった」「ディベートで使う英単語に対して、覚えようとする意識が高い」「一人ひとりが必ず発言する場があるので、生徒が緊張感を持って授業に臨んでいる」などの意見があった。進路指導主事の高木教諭は、「中3の段階から、全員がディベートを経験するという点が大きい。今後、これらの生徒が、どう伸びていくかが楽しみ」と期待する。ディベートを通じた英語力の成果検証は、GTECなどの外部試験を使い、経年データを比較するという。

課題は適切な評価方法の確立

ディベート実施を通して、今後への課題も見つかった。ディベートのジャッジや生徒への評価方法も良いやり方を探していきたいと話す。「ディベート自体の優劣を判断するジャッジは生徒が行なっています。定形のジャッジシートはありますが、生徒が優劣をつけるのはなかなか難しいですし、教員でも難しいと感じています。トレーニングの必要性を感じたため、教員間でジャッジ研修を行ないました。また、授業内で行うので、なんらかの評価を生徒に与えなくてはならない。生徒が自らの成長を実感できるフィードバックの方法を、検討していかなくてはならないと思います」（芝教諭）。

異文化を背景に持つ相手を理解するためには英語を使った議論が必要

今後、グローバル化がさらに進む社会で生きる生徒に必要な力について、それぞれの教員に意見

を伺った。

「異文化を背景に持つ人をリスペクトすることが大切でしょう。相手を深く理解しようとすると、言葉が必要になる。世界共通語である英語を使えるようになることはやはり重要です」(高木教諭)。

「ディベートでは、自分が考えていることと違う意見を言わなければならないケースが多々あります。生徒に勘違いしてほしくないのは、反対意見=相手を排除することではないこと。異なる考えを持つ人に対して理解を示しつつ、議論を深める力が必要だと考えます」(芝教諭)。

「英語には『We agree to disagree.』という慣用表現があります。意見の不一致を認めること、その違いを楽しむことを中学生にも体験してもらいたいと思います」(松岡教諭)。

「皆さんがおっしゃるように、相手の意見を受け止めて、自分の意見をきちんと発信することが大切だと考えています。そうした力を伸ばすにはディベートは適していると思います。ただし、生徒の話す意識が積極的になる一方で、ライティングに対する姿勢がおろそかになってはいけません」(楠山教諭)。

英語力に関して、高木教諭は次のように付け加える。「近年、スピーキングの重要性がクローズアップされていますが、4技能をバランス良くつ

けることが大切でしょう。どの力が欠けていてもいけません。総合的な英語力と大学入試で問われる英語力はコアの部分で一緒だと考えています」。

中高一貫校の強みを生かし 段階的に英語力を育成する

同校は、即興型英語ディベートのほかに、中3・高1生を対象にした「Yatsushiro English Town」という合宿形式の英語研修も実施している。2泊3日の期間中、外国人カウンセラーとともに生活し、英語しか話せない環境の中で異文化理解プログラムを体験する。2015年度は50人の生徒が参加した。また、中3生を対象とする海外ホームステイ研修も実施している。

中3、高1の2学年でこうした取り組みが充実している理由は、同校が中1、中2を「言語活動を充実させる期間」、中3、高1を「2年間かけた発信型英語力を養成する期間」と位置づけているからだ。高2、3の段階では準備型ディベートや英語レポートに取り組ませ、より高い英語での発信力とライティングの力を身につけさせる。

同校は今後も中高一貫校の強みを生かし、グローバル化に対応できる総合的な英語力養成に取り組む計画だ。

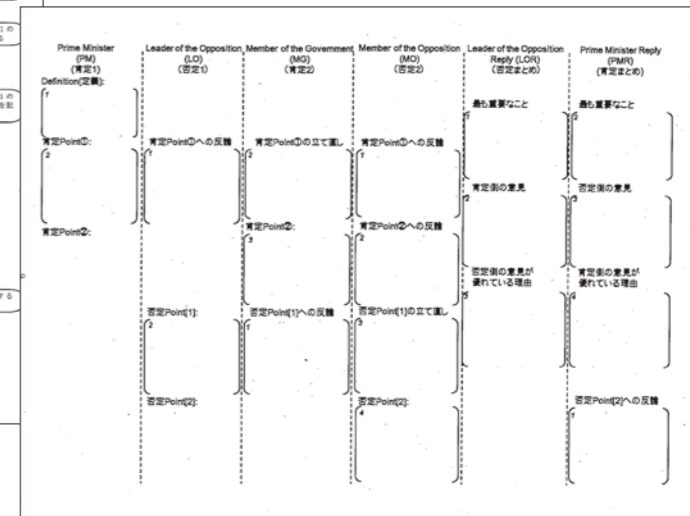


【中川智皓助教(大阪府立大)のコメント】

初めて訪れた時、八代高校の生徒は真面目な人が多く、少しおとなしい印象を受けました。2回目の指導で訪れた時は英語での発言も増え、積極的に取り組んでいる雰囲気がうかがえました。ディベートでは「内容」と「表現」の2点を評価しますが、特に生徒の表現力が向上しているように感じました。中学生でも十分、即興型ディベートができると思いました。今後も継続したディベートへの取り組みと、生徒のさらなる成長に期待しています。

【図版1】生徒用のスピーチシート

【図版2】進行を示すフローチャート



【図版3】生徒用のリフレクションシート

【図版4】議題と英単語を掲載したプリント

Domestic travel is better than traveling abroad for a school trip.			
修学旅行は海外より国内のほうがよい。			
precious	貴重な	travel abroad	海外に旅行する
experience	経験	school trip	修学旅行
culture	文化	waste	無駄
language	言語	domestic	国内の
different	異なる	home country	自国
local	現地の	historical	歴史的な
conversation	会話	urban areas	都会
extraordinary	非日常的な	rural areas	田舎
air planes	飛行機	social problems	社会問題
jet lag	時差	cheap	安価な
courage	勇気	bullet trains	新幹線
excited	ワクワクする	useful	役立つ
adventure	冒険	communication	意思疎通
any time	いつでも	casually	気軽に
unknown	未知の	arrive	到着する
broad	広大な	fun	楽しい
world heritage	世界遺産	cultural heritage	文化遺産
hardly+動詞	めったに~ない	shy	内気な
costly	お金のかかる	embarrassed	恥ずかしい
amazing	素晴らしい	talk to~	~に話しかける

引用：テキスト「授業のできる即興型英語ディベート」, 中川 智皓, 2014 参照

スーパーサイエンスハイスクールと連動した英語力向上の取り組み

長崎県立長崎西高等学校

SSHの指定を受けている伝統校

長崎県立長崎西高等学校は、旧制中学から続く伝統校であり、東大をはじめとする難関大への合格者を例年多数輩出する全国有数の進学校である。平成17年度から文部科学省「スーパーサイエンスハイスクール」に指定された。平成22年度からは二期目の再指定を受け、新しい研究をスタートさせている。英語指導の変革に取り組んでこられた2年英語担当の大山立身先生と、3年英語担当の中村陽介先生にお話を伺った。



GTEC for STUDENTSの結果から、課題のListeningを重点的に指導

——昨年度受検されたGTEC for STUDENTSの結果を拝見しましたが、1年生、2年生ともに大幅にスコアが伸びていました。成果に繋がった取り組みについてお聞かせください。

大山先生：本校の生徒はReadingやWritingについてはGTECでも良い結果を出すのですが、Listeningは他の技能に比べると物足りない結果が出るが多かったです。生徒が、Listeningのような音声活動をやや軽視する傾向が感じられました。英語力全体を引き上げるためには、Listeningの指導に力を入れる必要性を感じました。現2年生は、1年生時にGTEC受検に向けて、キーとなる単語やフレーズを聴きとる練習など、11月に2週間ほど集中的な指導を行いました。授業の中でも、コミュニケーション英語Iは極力、英語での発話やコミュニケーションを増やし、音読、Listeningを意図的に増やして行きました。

中村先生：現3年生は旧教育課程ですが、読解教材に取り組んだ後に何度も速度を上げて音読をさせるなど、Readingと音声活動を融合させた指導を心がけるようにしました。また、速読力を付けることがListeningにも繋がると感じ、授業の中で積極的に取り入れて行きました。

スーパーサイエンスハイスクールと連動した英語力向上の取り組み

——授業以外の時間を使った英語力向上の取り組みがあるとお聞きしています。

大山先生：昨年11月中旬からSSHの活動の一環

として「SGE(スーパー・グローバル・イングリッシュ)」という活動を始めました。国際的に活躍するグローバルリーダー育成のために、学校を挙げて英語力の強化に踏み出したのです。具体的な取り組みは次の4つです。

- ①朝の英語4技能強化タイム
- ②Lunchtime English
- ③3年生の放課後Listening強化タイム
- ④月2回程度のポキャブラリーコンテスト

特に、①朝の英語4技能強化タイムと②Lunchtime Englishは、課題であったListeningの強化に繋がったと感じています。朝の英語4技能強化タイムは、毎朝10分間、英語ディクテーションや、オーバーラップを行います。朝学習を毎日英語に変えたわけですが、他教科も協力的でした。

Lunchtime Englishは、昼休みに生徒やALTの英語スピーチを放送で流す試みです。水、金はランダムに選ばれた生徒数名がスピーチをしますが、自分で作成したエッセイを話す生徒が多く、WritingとSpeaking両方の力を試す機会になっています。この二つの取り組みは、元々意識が高

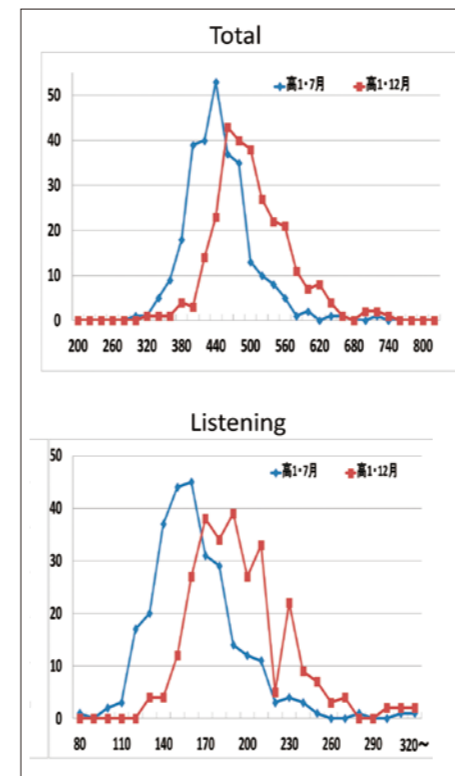
かったReading、Writingに加えて、Listening、Speakingなどの音声活動の重要性を実感させることに繋がっています。また、SSHの活動の一環として、昨年7月上旬に、外部のホールを貸し切って「校内研究発表大会」を開催し、3年生がSSHの研究成果を英語でプレゼンする場を設けています。今年は、理系だけでなく文系のテーマ、グループごとのプレゼンで全員の生徒が英語で発表しました。

Speakingの機会を授業の中でも増やす

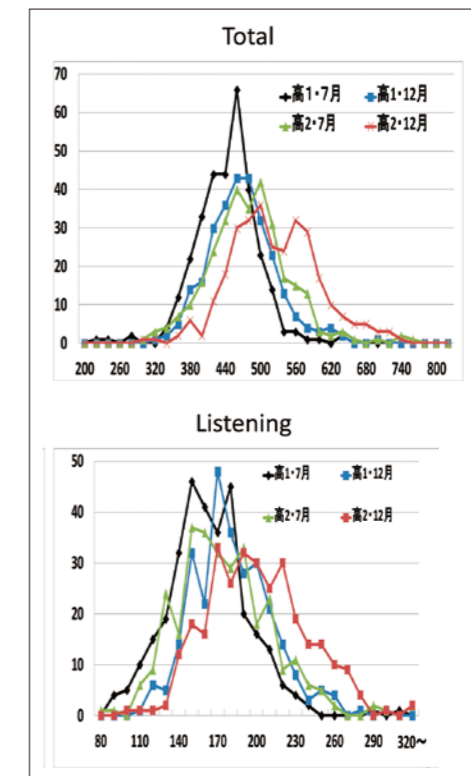
——Lunchtime Englishや、SSHの研究成果を英語でプレゼンするなど、英語でのアウトプット機会を数多く設けられていますが、授業でのSpeakingのご指導について教えてください。

大山先生：本校では週1回、コミュニケーション英語Iの時間の1コマをSSHの授業に充てており、科学的な題材を英語で学ぶ位置づけとしています。授業は英語教員とALTとSSH担当教員3名のTTで進めます。TTの中で、生徒に英語で自

[資料1] 高2生GTECスコア推移



[資料2] 高3生GTECスコア推移



分の考えを述べさせるなど、アウトプットに力を入れた活動をしています。中村先生：授業の進め方については、科学分野に関わる素材をSSH担当の教員が探して来て、英語教員と打ち合わせをしながら検討しています。週1回、英語を聴いたり、話したりすることに重点を置いた授業を行うので、「英語を話すこと」への抵抗感は少なくなってきました。

Speaking の評価にも着手し、一環として GTEC Speaking テストを実施

—— Speaking の評価についても教えていただけますでしょうか。

大山先生：昨年度は、先ほど話した、SSH 枠の TT の授業で年度末にパフォーマンステストを行いました。1 クラスを3名の教員で分担すると、1人当たり10数名の生徒の評価を行うこととなります。8クラスのパフォーマンステストは1週間で終わることができました。内容ですが、生徒は長崎県の歴史や特色についてまとめられた英語のスク립トを読みます。テストでは、教員が読んできた内容について英語で質問し、生徒が英語で答えるという形式です。プレゼンテーションやスピーチではなく、「やり取り」の力を測っています。プレゼンテーションなどの「発表」の力を測るテストは今のところ実践はしていませんが、授業や、Lunchtime English、SSH の研究成果を英語で発表など、機会はたくさん設けていますので、意識が高まっていると感じています。

——今年度、1、2年生で GTEC Speaking を実施予定と伺っています。質問を聞いて応答する「やり取り」だけでなく、4コマで表示されているイラストのストーリーを英語で話すなど、「発表」の力を問う問題も入っています。導入にした背景を教えてください。

中村先生：学校で行っているパフォーマンステストを補完する意味もありますが、それよりも生徒の英語学習の意欲喚起に繋がたいという意図が大きかったです。タブレットに音声吹き込み、録音された音声を採点する方式で、対面形式ではありません。

思うようにいかないケースもあると思いますが、

「もっと話せるようになりたい」という前向きな意欲を引き出すことに繋がるのではと期待しています。英語が言語である以上、生徒は当然「話したい」という欲求をもっているはずで、「もっと話したい」、「話せて楽しかった」という思いが、学習意欲の向上に繋がってくればと考えています。

Listening、Speakingの機会を増やすことが本来の生徒の力を引き出す

——様々な取り組みをされていていらっしゃいますが、成果としてお感じになられていることを教えてください。

大山先生：生徒が Listening、Speaking などの音声学習の重要性に気がついてくれたことが一番大きな成果でした。元々、Listening、Speaking の力が他の技能に比べて劣っているということはなかったと思います。SSH の活動や日々の授業を通して、「聴く」機会、「話す」機会を増やすことで本来自分たちが持っている力に気がついてくれたのだと思っています。

——最後に、今後に向けて進めていきたい取り組みや、生徒にどのような英語力を身に付けさせたいか教えてください。

中村先生：SSH の一環として始まった SGE の取り組みはまだ始まったばかりなので、その効果がどれだけ表れているか検証は必要だと感じています。

大山先生：生徒が英語を言語活動として捉えてくれるようになったことは非常に大きいと感じています。ただし、文章を読んで深く考える力や姿勢も生徒が失わないように指導して行きたいと考えています。

【この記事は「GTEC 通信 vol.87」に掲載された記事を元に再構成・リライトしたものです。】

Report

教育委員会
中高連携

統一アセスメントを活用した中高連携で 高校英語への接続をスムーズに

石川県七尾市

中高が同じアセスメントで英語力を測る

石川県七尾市では、2012年度から、地域の高校が実施していた外部の英語力テストを、市内の中学3年生全員を対象に実施。中高が同じアセスメントで子どもの英語力を測り、指導に生かしている。

2014年度には、中学校と高校の交流事業も開始。高校英語の実態を率直に伝えたことによって、中学生と中学校教員の英語学習に対する意識が変わりつつある。

校種を超えた「チーム七尾」で たくましく生きる子どもを育てる

七尾市教育委員会
教育長 近江一芳氏

インタビュー

学力差を縮めて 全ての子どもに学力保障を

七尾市は、「ふるさとに誇りをもち、将来、国際社会をたくましく生きる子どもの育成」を教育目標に掲げ、教育活動に取り組んでいます。今後5～10年で七尾市の子ども数は減っていく見込みです。小・中学校の統廃合が進み、複式学級も2校存在します。そうした中、能登地域の中核都市として七尾市が元気な能登を情報発信するためにも、教育が重要であると考えています。

本市の教育における課題の1つは、学力のばらつきです。市内には小学校13校*1、中学校6校がありますが、文部科学省の「全国学力・学習状況調査」の結果を経年分析すると、地域間や学校間だけでなく、学年間・学級間にも大きな差があることが分かりました。本市が独自に小学3年生以上を対象に行っている学力調査でも同様の傾向が見られています。

学力は全ての子どもに保障しなければなりません。そのためには、組織的に教員の指導力を向上させ、「学校力」を高めることが急務です。先生方にアセスメントの結果を示しながら理解を求め、小中高が連携し、さまざまな取り組みを行っています。

* 役職は2015年3月時点のものです。
* 1 2015年度は統合再編があり、小学校は12校となる。

市内全校の小中高連携で 教員が互いの良さを学ぶ

取り組みの1つめは互見授業です。各校が研究授業を行う際には、市内全ての小中高に通知しています。教員は誰でも参観でき、事後研究会にも出席して意見交換をしています。

2つめは教科部会の充実です。本市には小規模校が多く、特に中学校では1教科当たりの教員数が少ないために校内研修が十分に出来ませんでした。そこで、学校を超えて同じ教科の教員が集まって研修を行う教科部会を、定期的実施しています。

そのようにして進めてきた連携を更に深化させようと始めたのが、「授業改善推進会議」と「学力向上推進会議」です(図1)。

「授業改善推進会議」は、各小・中学校の研究主任が参加し、教員が誰でも同レベルの授業が出来るような学習スタイルの構築を研究テーマとしています。「定着型」「問題解決型」「課題発見型」「活用型」と、目的に応じた授業の進め方の「型」をつくるのがねらいです。2013年度は各校で1～3の型を作成して発表し、2014年度は各校でその型を実践しながら改善に努めました。

「学力向上推進会議」では、学力向上を目指す、授業以外での活動を研究しています。本市では校内研究の分掌に研究主任と研究副主任を置き、副主任を学力向上推進委員として、帯タイム(朝、昼休み、放課後)や家庭学習の改善の研究を進めています。

以前はどの学校でも、授業の進め方などは教員個々に任される傾向にありました。しかし、推進会議や学校の授業の様子を見ると、今は学校全体で教育改善に取り組もうという意識が高くなったと感じます。高校教員が小学校の、小学校教員が高校の授業を参観することは珍しくなく、各校の研究授業にはいつも大勢の先生方が参加しています。

小中高連携の成果は、徐々に表れてきています。帯タイムでは、どの学校も基礎・基本の定着だけでなく活用問題も取り入れ、学力上位層への対応も始めました。自校の児童生徒に応じて活用力を

付けるため自作問題を使っていますが、これが先生方の指導力向上にも結び付いています。また、「全国学力・学習状況調査」において、学校の平均点が県の平均以下だった小学校が、2014年度には平均点以上になるなど、学校間の差が縮まりつつあります。

図1 2014年度 授業改善・学力向上推進会議の内容

<p>① 授業改善推進会議 全小・中学校の研究主任が参加</p> <p>第1回 学習スタイル情報交換(授業の進め方の「型」づくり)</p> <p>第2回 学習スタイルに基づく授業実践 (模擬授業 小学校:国語・算数、中学校:美術)</p> <p>第3回 活用を意識した発展学習研究授業(中学校:理科)</p> <p>第4回 実践発表会</p>
<p>② 学力向上推進会議 全小・中学校の学力向上担当者が参加</p> <p>第1回 帯タイムの持ち方の交流</p> <p>第2回 帯タイムの有効な実践の交流</p> <p>第3回 活用力問題作成</p> <p>第4回 実践発表会</p> <p><small>*七尾市教育委員会提供資料を基にView21編集部で作成</small></p>

高校の英語指導の知見を 小中にも生かす

七尾市内の教員間連携が強くなったことを受け、更に学力向上に切り込もうと、2012年度、石川県立七尾高校との英語における中高連携を始めました。各種学力調査の結果を見ると、市内の中学校では英語の成績が県内の他地域と比べて低く、5教科の中でも弱点であることが分かったからです。特に、県内の金沢市は「小中一貫英語教育特区」として英語教育に力を入れているので、本市も対策を取らなければ、他地域との差が開くばかりです。

本市では、人口減少対策として定住促進だけでなく、本市を訪れる交流人口の増加を重要施策に位置付けています。特に北陸新幹線が開通し、能登地域へのアクセスも良くなりました。観光業の活性化が期待され、外国人観光客に対応できる人材の育成が重要になってきています。国際社会で活躍する人材と共に、地域においても英語力は必要なのです。

これらの観点から英語教育を重点化し、高校の

英語教育の知見を小中学校の指導に生かせるよう、学校種を超えた連携を図っています。また、保護者にも英語力の重要性を理解してもらい、家庭の協力も得られるよう、子どもが英語を使って活動する様子を保護者が見る機会を設けるなど、意識的に働き掛けている。

教科部会や2つの推進会議などを通して、「チーム七尾」として市全体の教育力が高まってきています。失敗を恐れずに新しい取り組みに挑戦できるように、そして、先生方の本分である教育に力を発揮できるように、これからは教育環境を整えていきたいと思っています。

中高合同の教員研修会や模擬授業を通して教員の意識改革が進む

—教育委員会の取り組み—

中高統一のアセスメントで 英語教育の課題を浮き彫りに

七尾市教育委員会は、石川県立七尾高校からの働き掛けをきっかけに、同校と市内6中学校との中高連携を推進している。七尾高校では、入学時に国語や数学に比べて、相対的に英語の学力が低いことが恒常的な課題であると、同校の山本登紀男前校長から三浦光雄前教育長に説明があったためだ。

更に、七尾高校が行う中学生向けの学校説明会でされた、高校生のアドバイスの影響も大きかった。「英語はとても大事だから、中学校では英語を頑張っておいた方がよい」「高校でいちばん困るのは英語だ」と、口を揃えて中学生に伝えていたという。

「教員も生徒も、英語が最も課題だと言っている。それなら、中学生と高校生との英語力の差を検証しようということになりました」と、学校教育課の藤澤浩課長は説明する。

2012年度、市内の中学3年生全員がGTEC for STUDENTSを受検した。七尾高校では10年以上継続して受検している英語力テストであり、中学生・高校生の英語力を同じ指標で測れるからだ。更に、Listening、Reading、Writingの技能別にスコアが出るため、課題のある分野を抽出できるという利点もあった。

受検に際しては、「中学校では学習指導要領に基づき十分に指導している」「英語力は他の試験でも分かる。外部試験を行う必要があるのか」という疑問の声もあった。そこで、前校長や高校教員が中学校校長会や教科部会に参加し、高校のデータを示しながら、高校生の英語力の実態や、統一したアセスメントで英語力を測る重要性を説明。まずは詳細な実態把握が必要という理解を得る努力をして、受検が決まった。市が半額を負担し、残りを受検者負担とした。

GTEC for STUDENTSの結果は、高校側の課題意識を裏付けるものであった。

「中学3年生と高校生のスコアの差はあまりにも大きく、高校1、2年生で大幅に伸びていることが分かりました。逆に言うと、中学校側は生徒の力を伸ばし切れていないという課題を突き付けられることになりました」と、学校教育課の種谷多聞課長補佐は振り返る。

2012年度はWritingのスコアが他の2技能に比べて低かったため、2013年度には、各中学校が宿題などで英作文を課し、添削を行うといったWritingの指導を意識して行った。すると、同年に受検した時にはWritingのスコアが大幅に上昇。この経験が教員の意識を変えたと、子ども教育課の内田幸子指導主事は言う。

「客観的な数値の説得力は、大きなものがありました。自分たちにはもっと出来ることがあるので

はないかと、中学校での英語指導を見直す機運が高まり、英語力テストも受け入れられるようになりました。

中学校の英語の授業が “Almost All English”に

このようにして中高の関係を築いた上で始めたのが「中高連携推進事業」だ(図2)。2014年度の実施初年度は、中高の教員の交流と、中高の生徒の交流を柱とした。初年度の目的は「七尾高校に学ぶ」。高校ではどのような指導をしているのかを学び、中学校の授業改善に生かすことをねらいとした。

中高教員の交流は年4回実施。いずれも、市内6中学校の英語科教員約20人、ALT6人は全員参加し、七尾高校の英語科教員10人、ALT2人も所用がない限り参加した。

「ALTは各中学校に1人常駐しており、ほぼ全ての英語の授業を担当しています。T2としての役割に悩んでいるALTもいますので、参加してもら

いました」(種谷課長補佐)

教育委員会が場の設定と大枠を決め、内容は高校側に委ねた。高校が交流全体を通して強調していたのは、All Englishによる授業の実施だ。

「第1回の研修会で『日本語は授業で全く使わない』という高校の先生の説明に、中学校の先生は驚いていました。しかし、『生徒が分からないからと少しでも日本語を使うと、生徒はそれを期待してしまい、英語学習の妨げになる』という説明に納得したようでした」(内田指導主事)

中学校教員のそうした意識の変化を後押ししたのが、第2回の模擬授業だ。中学3年生2学期のある単元を設定し、中高教員のティーム・ティーチングによるAll Englishの授業を行った。

「生徒役となった英語科教員は、第1回で聞いた説明を実際に体験し、英語で授業を進めた方がよいという意識が強くなっていました。今では、どの先生も“Almost All English”で進めています。中学校を視察した方々が皆、『生徒が英語をたくさん活用しながら授業が進められている』と驚かれるほ

どです」(内田指導主事)

中学生と高校生の交流は年3回実施。七尾市立朝日中学校を拠点校とし、同校の3年生が高校での英語学習を体験できるよう、高校と中学校とが話し合いながら内容を設定した。高校の教員とALTによるAll Englishの出前授業や、中高生混合チームによるディベート大会と、中学生にとってハードルの高い活動だったが、高校で学ぶ英語のレベルを知り、「もっと英語を学びたい」と前向きな声が多く聞かれたという。

6年間のCan-do リスト作成と 小中高の連携が課題

今後の課題は、中高6年間を見通したCan-doリストの作成だ。中学校ではCan-doリストを作成したばかりで、高校でもCan-doリストの十分な活用が今後の課題となっている。今後、中高接続を意識した授業を進める上で、一貫性のある評価が重要になる。そうした考えから、第3回の中高教員の交流では、中学校教員がCan-doリストを生かした研究授業を実施し、Can-doリストの活用について識者による講演が行われた。

もう1つの課題は、小学校での英語の教科化を見据えた小中高の連携だ。「模擬授業では、希望者の小学校教員も生徒役を務めました。『英語が分からず、授業についていけない子どもの気持ちが分かった』と話す先生もいました。小学校で英語が教科になると、小学校段階で英語嫌いになってしまう可能性があります。そうならない指導を考えなければなりません」と、藤澤課長は語る。

小学校の外国語活動で出前授業を行う中学校もあるが、小中のスムーズな連携のためにも、2015年度は小学校の拠点校を決め、中学校の拠点校も新たに置いて、小中高連携を推進していく考えだ。

図2 2014年度 中高連携推進事業概要

中高教員の交流 原則として中学校英語科の全教員、七尾高校英語科の全教員が参加	
第1回(5月) 英語力調査の結果分析と 七尾高校の指導法研修	<ul style="list-style-type: none"> 「GTEC for STUDENTS から見た七尾市の英語力の現状とGTEC for STUDENTS の活用について」外部講師の説明 「七尾高校における英語科指導法」七尾高校英語科教員による研修 グループ協議「英語科で取り組む授業改善」「英語科での個別支援計画と進捗」
第2回(8月) 模擬授業	<ul style="list-style-type: none"> 高校教員をT1、中学校教員をT2とし、その他の英語科教員を生徒役として模擬授業を実施 「All English でのTTの模擬授業から生徒の主体的な学びについて考える」 グループ協議「T2の支援が有効だったか」「活用場面で生徒が主体的に活動できたか」など
第3回(12月) 研究授業と講演会	<ul style="list-style-type: none"> 中学校教員による研究授業 「Can-do リストと評価のつながりについて」 広島大学附属中学・高校の教員による講演 グループ協議「本時での評価場面における評価は適切だったか」「本時のねらいとCan-do リストの関連はどうだったか」など
第4回(2月) 英語力調査の結果分析と 次年度に向けての協議	<ul style="list-style-type: none"> 「GTEC for STUDENTS」の2014 年度の結果と分析 グループ協議「教員の英語力は向上したか」「来年度に向けて改善すべき点は何か」など
中学生と高校生の交流 拠点校・朝日中学校の3年生と七尾高校の生徒との交流	
第1回(6月) 七尾高校見学	<ul style="list-style-type: none"> 高校生による英語学習についてのアドバイス、質疑応答 理科・普通科文系フロンティアコースの海外学習報告プレゼンテーション
第2回(7月) 出前授業	<ul style="list-style-type: none"> 七尾高校の英語科教員とALTによる中学校での出前授業
第3回(12月) ディベート大会	<ul style="list-style-type: none"> 中学3年生52人と、高校普通科2年生30人が混合チームをつくり、英語でディベート

*七尾市教育委員会提供資料を基にView21編集部で作成

この記事は「VIEW21」教育委員会版 2015年度 vol.1に掲載されたものです。

“生徒が使える”CAN-DOリストで、 生徒の学ぶ意欲を引き出す

猪苗代町立東中学校

英語指導力向上事業の地域拠点校

猪苗代町立東中学校は、2012年に文科省の「英語力を強化する指導改善の取組み」において、拠点校に指定された。近隣の中学校4校と連携し、CAN-DOリストを活用した授業を実践されている。

2014年度から、「英語教育推進リーダー」として県から推薦を受けられた、英語科 渡部真喜子（ワタナベ マキコ）先生にお話をうかがった。



地域と連携したCAN-DOリスト作成 拠点校・協力校の取り組み

——貴校では拠点校事業をきっかけに地域でCAN-DO（資料1）を作成されていますが、CAN-DO作成のポイントを教えてください。

渡部先生：2012年に文科省の「英語指導力向上事業」において、本校が拠点校に指定されました。本校を拠点校として、会津地区の中学校4校、2013年からは小学校3校も協力校となり、「CAN-DOリストを活用した授業展開」についての実践研究が始まりました。どのような英語力をつけて卒業させるか、その時点での理想となる生徒をイメージして、そこから逆算型でアプローチします。

目標に到達するためには、各学年でどの程度の英語力を身につけさせなければならないのかを具体的に考えていきました。

また、学習指導要領と教科書、CAN-DOリストにつながりをもたせるために、教科書で設定されている評価基準を指標のベースにしています。

こだわりは「生徒が使える」 CAN-DOリストを作ること

渡部先生：何より大事にしたことは、「生徒が使えるCAN-DOリスト」を作るということです。抽象的すぎたり、文法項目など指導内容が詳細すぎたりすると、指導者・学習者ともに理解することができません。実際に学習者が使って有益であること、学習者の学びの姿を通して、教師が授業の改善につなげられるものでなくてはならないと考えたので、生徒が使うことを想定して作りました。「生徒が使える」ためには、生徒の実態にあわせた

CAN-DOリストを作る必要があります。それぞれの中学校、学年によって、学力やパーソナリティといった生徒の様子は異なります。受け持つ生徒の様子を想定しながら、作るのがポイントかと思いました。

本校が拠点校でしたので、CAN-DOリストの叩き台を作り、前述の外してはならない作成のポイントを協力校の中学校4校に共有、連携しながら作成を進めていきました。適宜、中学校5校でTV会議システムを利用して情報交換やフィードバックをおこないながら、学校独自のCAN-DOリストを作成しました。

チェックシートでの自己評価が 学びの動機づけにつながる

——CAN-DOリストを活用して、生徒・教員にどのような効果がありましたか？

渡部先生：チェックシートで自己評価をさせたことが、学びへの動機づけになっていると感じます。チェックシートには、各CAN-DOに自己評価の欄を設けています。生徒はそのときの理解度、定着度を自己評価します。単純な数値化より、さらに生徒に身近に感じさせることができるよう、評価の指標部分にイラストを使用しました。その方がより生徒のその時の感情に近い反応が得られると判断した為です。このチェックシートはCAN-NOT-DOリストになってはダメで、CAN-DOを実感できる仕掛けが必要です。このシートは、復習もかねて複数回、授業で活用しますので、推移で記録し、徐々にレベルが上がっていく実感、喜びをもてるようにしました。それが次の授業への動機づけにつながればと考えています。

何ができるようになったかを気づかせる “What more can you do?” の自由記述欄

渡部先生：生徒から評判が良かったものは、「What more can you do?」の自由記述です。「前回の授業で教わった単語を使えるようになった」「教科書の内容理解が深まった」など、こちらが想定していたCAN-DO以外にも生徒はできるようになった実感をもっている様子がありました。

また、生徒からの「CAN-DOリストは感動（CAN-DO）リストです」という言葉が印象的でした。生徒たちが「これまで学んだこと覚えている。覚えているか、覚えていないかがわかる。感動しますよ!」と言ってくれ、とても嬉しかったです。

CAN-DOリストは、私たち教員がどのような授業をして、生徒はなにを学び、なにを感じたか、多くのことに気づかせてくれるリストだと思います。

GTECのライティングを通じて、 読み手を意識して 表現することの大切さに気付く

——拠点校に指定されてからGTECを受検されていますが、どのように活用していますか？

渡部先生：GTECは拠点校として指定されてから、12年度は中1・2学年、13年度は全学年で、1年間の学習の総まとめとして実施しています。

生徒はGTECを定期テストと同じと捉えていません。定期テストよりGTECは難しいとわかってはいますがチャレンジできるようになってきている実感もあるようです。

特に、エッセーライティングの採点の考え方は学習者の励みになります。

たとえば、たくさん文章を書いた生徒のスコアが70点で、その半分の量しか書いてない生徒のスコアが90点だった場合、その違いはどこにあるのだろうと生徒は考えるようになりました。スコアの差として表れているのは「読み手が書き手の心情や状況を想像できるか、感じ取ることができるか」ということがポイントであると認識させました。表現者として「読み手への配慮や姿勢」が大事だと気づいてくれたことは大きな成果でした。

GTECを機に、 定期考査の見直しにも着手

渡部先生：また、GTECを実施するようになって、定期考査も見直しました。これまでは和文英訳などが中心でしたが、本当に英語の表現力を測っているのか？という点に課題がありました。定期テストの配点には上限があるため、点数や順位には反映されないが、評価・評定の「表現」の部

分の一部に加味することを周知した上で、英作文の問題を出題しました。表現力(相手に伝わる力)を4段階に別評価しました。

今では、GTECのエッセーライティングのように、「好きな言葉について書きなさい」など1つのトピックを与えて、自由に書かせています。すると、生徒たちには好きな理由だけでなく、そう思うに至った背景や、生徒独自の感性など、ストーリーを書いてくれるようになりました。

CAN-DO をベースにした「英語で学ぶ」指導への移行

—CAN-DO リストをもとに、どのような指導改善に取り組まれていますか？

渡部先生：「英語を学ぶ」から「英語で学ぶ」への移行を意識しています。

まず、生徒たちは教科書、ノート、ワークブック、スピーキング教材などを用いて、語彙、文法の基本事項を学びます。

今回の Lesson で学ぶ表現、CAN-DO を押さえてから、本文の内容理解に入ります。教科書の本文を訳読するのではなく、「筆者の主張は?」「この文言は読者にどのような意識をもたせる?」「この段落の要約は?」「もし、あなたがこの物語の主人公ならどう感じる?」など、「英語で」本文の内容

理解を深めています。生徒も「英語」で国語の授業を受けているような感覚をもっているようです。

このような活動から、CAN-DO チェックシートの自由記述に「落語のことについて、より理解が深まった」など、内容理解の深まりを CAN-DO として認識してくれる生徒も現れてきました。

英語教育推進リーダーの研修を経て、更に授業のブラッシュアップを継続

渡部先生：今年からは「英語教育推進リーダー」として指名いただいたため、6月につくば市で行われた中央研修に参加しました。

それを受けてからは、All English を導入して、イントロダクションはすべて英語にするなど、授業内容をブラッシュアップしています。

生徒たちも、私が推進リーダーとして研修に参加していることを知っていて、新しい取り組みも「自分たちのためにトライしてくれている」と理解してくれています。

生徒たちの理解と協力、向上心が本研究を大いに支えています。前向きに学習に励む生徒たちの英語力向上に寄与するよう努めています。生徒たちのおかげで、授業が発展していると感じます。

この記事は「GTEC 通信 vol.85」に掲載された記事を元に再構成・リライトしたものです。

【資料1】猪苗代町立東中学校 CAN-DO STATEMENT

	1学年 (K7)	2学年 (K8)	3学年 (K9)
聞くこと	1) なじみのある表現を聞いて、理解することができる。 2) なじみのある質問やあいさつなどを聞いて、適切に対応することができる。	1) 自然な口調で話されている短い英語を聞いて、大切な情報を聞き取ることができる。 2) 話し手(AITなど)の伝えたい内容を、適切にあいさつやうなづなで理解することができる。	1) 自然な口調で話されている多量のある英語を聞いて、内容や大切な部分を正確に聞き取ることができる。 2) 必要に応じて「聞き返し」しながら、話し手(AITなど)の伝えたい内容を理解することができる。
話すこと	1) 自己紹介や物についての紹介を原稿を基にスピーチすることができる。 2) 今の自分の気持ちや状態を、相手に正確に伝えることができる。	1) 与えられたテーマやトピック、事象について、原稿を基にするなど考えを整理しおいた後に正しい英語でスピーチすることができる。(原稿無し) 2) 自分の考えや気持ち、意見を整理し、正しく伝えることができる。 3) 聞いた/読んだ/見たことについて、十分な量などをつながりながら、話し手(AITなど)と関係したり意見を述べあうことができる。	1) 与えられたテーマやトピック、事象について、その場で考えをまとめて正しい英語で簡潔にスピーチすることができる。(原稿無し) 2) 自分の考えや気持ち、事象などを聞き手の様子を見ながら、工夫して伝えることができる。 3) 聞いた/読んだ/見たことについて、話し手(AITなど)とつながりある話題をつなぐなど話を続ける工夫をしながら、関係したり意見を述べあうことができる。
読むこと【単語】	1) 1年生の教科書本文を、英語らしい発音に気をつけながら、ゆっくりに音読することができる。	1) 2年生の教科書本文を、発音や意味のまどまりに気をつけながら音読することができる。	1) 3年生の教科書本文を、発音やイントネーション、リズムに気をつけて、気持ちよく音読することができる。
読むこと【内容理解】	1) 120words程度の英文を40sec以上のスピードで読み、書かれている内容をとらえることができる。 2) 本文を読んで、おもしろかったところはどこか、大切な部分はどこかを考えながら読むことができる。 3) 手帳などを読んで、書き手の言いたいことを理解することができる。	1) 160words程度の英文を50sec以上のスピードで読み、書かれている内容をとらえることができる。 2) 感想や質問、その理由などを必ず目的を持ちながら本文を読み、書かれた内容や書き手の意図を理解することができる。 3) 手帳などを読んで、書き手の言いたいことを整理し、どのように感じるかを考えながら読むことができる。	1) 260words程度の英文を60sec以上のスピードで読み、書かれている内容をとらえることができる。 2) 感想や質問、その理由などを必ず目的を持ちながら本文を読み、書かれた内容や書き手の意図を理解することができる。 3) 手帳などを読んで、書き手の言いたいことを整理し、どのように感じるかを考えながら読むことができる。
書くこと	1) 身近なことや出来事について、3文以上のつながりある英文を正しく書くことができる。(辞書あり) 2) グラフやカードの機会のように、形式にならって短い英文を書くことができる。 3) 聞いた/読んだ/見たことについて、単語程度でメモをとることができる。	1) 身近なことや出来事について、読み手を意識して、4文以上のつながりある英文を正しく書くことができる。(辞書あり) 2) 様々なことについて、自分の考えや感想を理由をつけて書くことができる。 3) 聞いた/読んだ/見たことについて、メモをとったり、簡単に英文でまとめることができる。	1) 様々なことについて、5文以上のつながりある英文を原稿や補助教材なしで即興で、読み手が理解しやすいように工夫しながら正しく書くことができる。(辞書なし) 2) 与えられたテーマやトピック、事象について、自分の気持ちや考えが正確に伝わるように、英文のつながりを意識して書くことができる。 3) 聞いた/読んだ/見たことについて、簡単にまとめる、感想や質問やその理由を書くことができる。

【資料2】各Lessonの CAN-DO 一覧

Lesson	内容	達成度
1	自分の好きなことやものについて、英語で簡潔にスピーチすることができる。	1
2	自分の好きなことやものについて、英語で簡潔にスピーチすることができる。	2
3	自分の好きなことやものについて、英語で簡潔にスピーチすることができる。	3
4	自分の好きなことやものについて、英語で簡潔にスピーチすることができる。	4
5	自分の好きなことやものについて、英語で簡潔にスピーチすることができる。	5

【資料3】各技能の CAN-DO 一覧

技能	内容	達成度
聞くこと	1) 自然な口調で話されている短い英語を聞いて、大切な情報を聞き取ることができる。	1
話すこと	1) 自己紹介や物についての紹介を原稿を基にスピーチすることができる。	1
読むこと	1) 120words程度の英文を40sec以上のスピードで読み、書かれている内容をとらえることができる。	1
書くこと	1) 身近なことや出来事について、3文以上のつながりある英文を正しく書くことができる。	1

【資料4】CAN-DO CHECK SHEET

LESSON 6 I have a Dream

項目	達成度	1	2	3	4	5
話すこと	自分が尊敬する人物について、英語でスピーチをすることができる。	/	/	/	/	5
読むこと(音読)	スピーチ原稿を、相手に伝わるように気持ちよく読んで、英語らしく音読することができる。	/	/	/	4	5
書くこと	尊敬する人物について等、英語でスピーチ原稿を書くことができる。	/	/	/	/	5
読むこと(内容理解)	英語で書かれた人物伝などを読んで、その内容を読み取ることができる。	/	/	/	/	5

date What more can you do?

11/13 I can use 猪苗代 and I can make sentences.

11/19 I can compare that "how to use 'create' and 'make'"

12/1 When we make a speech, it's very important for us to speak understandable and keep in our mind about history.

/ I can write sentences about the person I respect. Also, I can improve them by myself better than before.

12/2 I can introduce the person I respect. When I made a speech, I could explain and judge. I was thinking about history when I talk. Class No Name

When I was history, I understand that my friends what they want to say.

4技能を統合して育成し、大学入試改革に対応する指導・評価について研修

福井県教育委員会

県の公立中高の全英語教員研修

福井県教育委員会は、2015年8月、県内の全ての公立中学校・高校の英語教員を対象に、「中高英語教員指導力向上研修」を実施した。講師はベネッセのGTEC開発担当者が務め、技能統合型の言語活動のあり方や、英語運用力を育成する観点からの定期考査・パフォーマンステストの見直し方について、参加者は様々な活動をしながら学んだ。ここでは、高校教員を対象とした研修会の模様をレポートする。



GTECの評価ノウハウを校内のテストに応用

福井県では、英語の4技能運用能力の育成と共に、新たな大学入試への対応を視野に入れ、英語教育の改革に取り組んでいる。現在、公立高校の入試において、スピーキングの導入も検討中だ。

改革の中で特に注力しているのが、評価方法の見直しだ。2012年度には、全ての公立高校がCAN-DOリストを作成している（公立中学校に対しては13年度に実施）。ただ、その活用については課題があり、特に表現活動を評価するノウハウを求める声も多い。そこで着目したのが、県内で導入が進んでいるベネッセのGTEC for STUDENTSだ。スピーキングとライティングについて、GTECの採点方法や採点基準などを学ぶ

福井県教育委員会 「中高英語教員指導力向上研修」プログラム

●第1部 「指導と評価の一体化」ワーク—CAN-DOリストと定期考査の比較検証

福井県教育庁学校教育政策課言語・総合教育グループ
主任 浅井裕規

●第2部 「英語教育環境の変化」 ベネッセコーポレーション高校事業部 GTEC 事業推進課 課長 込山智之

●第3部 「日々の指導・評価に生かせる、作問・クワイテリア・マーキング」

—GTEC for STUDENTS のスピーキングテストを通して
GTEC 統括編集長 渡辺都子
GTEC コンテンツディレクター 森野勉
(研修コンテンツ作成協力/玉川大文学部英語教育学科
工藤洋路准教授)

*研修資料を基に VIEW21 編集部で作成

ことで、それらを定期考査やパフォーマンステストなどに応用できないかと考えたのだ。

教育委員会では、ベネッセから講師を招き、15年8月の2日間、県内全ての公立中学校・高校の英語教員を対象に4技能の指導や評価の改善を図る研修を実施。1日目は中学校教員71人、高校教員2人、2日目は中学校教員5人、高校教員28人が参加し、同じ内容で研修が行われた。その主な内容を紹介する。

第1部

「指導と評価の一体化」ワーク

パフォーマンステストや 観察なども実施

まず、自校ではどの程度、指導と評価の一体化がなされているのかを、参加者が確認するためのグループワークが行われた。コーディネーターを務めたのは、福井県教育庁学校教育政策課の浅井裕規主任だ。

参加者はペアを組み、持参した自校の定期考査の問題とCAN-DOリストの内容とを比較し、内容が関連する箇所を説明し合った。続いて、5～6人のグループとなり、自校の英語指導について良い点や課題を説明し合い、指導ノウハウを共有。その内容をまとめ、各グループの代表者が全体発表を行った(図1)。福井県では、既に全ての公立中学校・高校がCAN-DOリストを作成した。今後の課題は、そのリストを活用すると共に、生徒や保護者にも公表することだ。「CAN-DOリストは教員だけのものではありません。生徒や保護者も、到達目標を把握することにより、変わりつつある英語指導の意義を理解できます。また、CAN-DOリストに基づいてコミュニケーションな授業を実施しても、評価とリンクしていないと教育効果が十分に現れません。スピーキングはペーパーテストで評価は出来ないのでパフォーマンステストや日々の授業における観察などによる評価も併せて行うのが望ましいでしょう」と浅井主任は強調した。

【図1】CAN-DOリストと定期考査の関連についての発表内容

●定期考査の問題とCAN-DOリストが関連している点

- ・教科書の内容に関連する初見の文章での正誤問題などを出題した。
- ・教科書の中の課題文のテーマに関する自分の意見を英語で話す練習を授業でさせた上で、それを英語で書く問題を出題した。
- ・CAN-DOリストの「挨拶が出来る」の項目に沿い、挨拶のやりとりを会話形式の問題として出題した。
- ・教科書の中の課題文で印象に残った内容を選び、その理由を含めた英作文を書く問題を出題した。
- ・初見の英文を読み、ペアで内容について話し合い、その後、自分の意見を述べるというテストを実施した。
- ・定期考査では、まとまった量を書かせる時間が取りにくい。そこで、授業中に英作文のテストをしたり、ALTによるパフォーマンステストを実施したりしている。
- ・生徒用CAN-DOリストを技能ごとに作成。生徒は4段階で自己評価をして到達度を確認する。

●今後の課題

- ・CAN-DOリストの内容を、教員が全て把握できているわけではないため、定期考査ではCAN-DOリストと関連していない問題も出題している。
- ・CAN-DOリストを活用して、評価方法に占める定期考査の割合を減らし、Speaking、Writingのパフォーマンステストや小テストの割合を増やす。

*取材を基に VIEW21 編集部で作成

第3部

日々の指導・評価に生かせる、 作問・クワイテリア・マーキング

技能統合を意識した言語活動が必要

第2部の講演で、今後の大学入試において英語の4技能が重視されていくという環境変化の解説がなされた後、第3部では、4技能を評価するために日頃のテストではどのような出題をすればよいのかについて、講演とグループワークが行われた。

まず、GTEC 統括編集長の渡辺都子がライティングの評価について説明。一例として、14年度、文部科学省「英語教育改善のための英語力調査事業」(*1)で出題された情報要約問題を紹介した。これは、1分程度の英語の音声を聞き、約30語で要約するという問題だ。参加者はその問題に取り組んだ後、「問題を解くために必要なスキル」「そのスキルを育成するための言語活動」について、ペアを組んで意見交換をした。

参加者からは、「リスニング力はもちろん、英語

の文章の構成を読み取る力やメモを取るスキル、また、メモから文章を書き起こす力などが必要だ」という声が上がった。それに対し、渡辺は、「本問題は、英語の音声を聞いて、英語で要約する、つまり『聞く→書く』という技能統合型の問題であり、定期考査のように、授業での学習内容の理解度や定着度を測る問題ではありません。このような技能統合を意識した言語活動を通して、必要なスキルが養われていきます」と説明した。

「英語教育改善のための英語力調査事業」では、技能別のレベルを示す国際標準規格として欧米では一般的な CEFR (*2) によって評価していることについても解説した。

「CEFR は、action-oriented、つまり、『英語を使って実際に何が出来るのか』という観点で英語力のレベル分けをしています。英語を使う環境において、授業で学んだ事柄を使うと何が出来るのかを考える良い機会となるはずです」と、渡辺は話す。

また、文法指導に関しては問題を提起。個別の知識にとどまらず、「書く・話す」を見据えた文法指導の重要性を強調した。文法指導に関する課題の一例として、同じ知識を問うているものの、形式を変えると正答率が大きく異なる2つの問題を提示(図2)。「生徒が頭の中の引き出しから必要な文法を引き出せないことが、正答率の差に表れています。場面に応じて必要な文法を引き出せる運

【図2】出題形式の違いによる正答率の違い

〔歌舞伎公演のポスターを見て〕

Koji : Do you know about kabuki?
Mike : Yes, but I have seen it.
(否定文にしない。)

Koji : Really! Then you should see it. Let's go together.

正答率 65.3%

〔歌舞伎公演のポスターを見て〕

Koji : Do you know about kabuki?
Mike : Yes, but _____ it.
(see)

Koji: Really! Then you should see it. Let's go together.

正答率 24.5%

*研修資料を基に VIEW21 編集部で作成

用力を伸ばす指導が、文法指導では大切です」と指摘した。

更に、Reading Passage から「書く」言語活動をどうつくるのかについても、具体的な問題を提示しながら説明が行われた(図3)

【図3】Reading Passage から「書く」言語活動への移行

①英文を読み、理解・確認をする
初めに概要を捉えさせる。

②生徒とのインタラクション
英文の内容を考慮しながら、教師と生徒が英語でやりとりをし、自分の問題に置き換えて考えさせるなどして、英文と生徒を結び付ける。ここは書く活動の前提となる話す活動の段階であり、問題提起であるため、うまく答えられなくてもよい。

③Writing 活動の設定
「書き手の立場」「書く目的」「読み手」などを設定し、より authentic なタスクを提供することが大切。
*研修資料を基に VIEW21 編集部で作成

スピーキング力が伸びる活動とは何かを実際に体験

スピーキングの評価については、まず、参加者全員が GTEC for STUDENTS のスピーキングテストを、実際の形式と同じようにタブレット端末を使って解いた。

次に、GTEC コンテンツディレクターの森野勉が講師となり、授業で出来る言語活動として、教師役が生徒役に質問して話を引き出しながら2分間会話を続けるペアワークを行った。その際、「What's the date today?」「How's the weather?」などの Display Question (質問者が答えを知っている質問、学習者の理解を試すための質問) から徐々に踏み込み、Referential Question (質問者が答えを知らない質問、コミュニケーション目的の質問) を増やしていくことで、会話が活性化し、生徒が英語を使う練習になると説明された。

ワーク後、数組が発表し、「質問は生徒が答えやすいものにする」「生徒が答えた事柄に関連する質問をする」「教師より生徒が多く話すようにする」「教師が支援し、生徒が発言できなかったことを言えるようにする」といった活動のポイントを共有した。

次に、論理的に話す力を伸ばす活動として、メモを活用したスピーチの手法が紹介された。参加

者は「The recent news that impressed me」というタイトルのスピーチを2分間で準備し、代表者2人が各1分間で発表した。「メモはキーワードのみとし、英文を書かないのがポイントです。即興的に文法を組み立てて話す練習になります」と、森野は話す。

スピーキングの評価方法も詳しく解説。森野は、「複数の教師が異なる観点で評価する場合を除き、教師1人で内容や発音、正確さなどのあらゆる観点を同時にチェックするのは難しいと思います。そのため、『会話を1分間続けられるか』『指示通りの内容が含まれているか』など、具体的な観点を決めておくのが望ましいでしょう」と事前に評価のポイントを絞り込む重要性を強調した。生徒には、「学習した表現を入れる」「意見の理由を述べる」など、評価の基準にかかわる指示をしておくとうまいと、森野は話す。

質疑応答

中高一貫校の強みを生かし段階的に英語力を育成する

最後の質疑応答では、参加者から多様な質問が寄せられた。「生徒の実態を踏まえると、文部科学省の設定する目標は高過ぎるのではないか」という質問に対して、高校事業部 GTEC 事業推進課課長の込山智之は、「確かに高度な英語力の育成を目指し、改革のペースがこれまでにない速いのは事実だと思います。ただ、文部科学省は、各校の生徒に合った内容やレベルの教材を用いた活動を行うことを基本方針としています。

生徒の実態に合わせて無理なく、興味・関心を高めやすい内容や形式の言語活動を導入することが求められています」と述べ、あくまでも生徒目線での活動の重要性を語った。

英語の外部検定試験でのライティングの問題に関して、「採点では、表現の型が優先され、現実の場面で用いる英語とはやや食い違いがあるのではないか」という質問があった。

それに対し、森野は「生徒のレベルによっては、ある程度、型を与えることは大事ですが、それが全てではありません。自然な流れの会話と判断さ

れば、型通りでなくても減点されることはない」と、生徒たちに伝えてください」と、GTEC での採点基準を例に挙げ、現実場面に即した運用能力を伸ばす大切さに触れた。

「指導と評価の一体化」の考えに基づき、まず評価方法を変えることで、指導の内容や方法、そして生徒の意識の変革を図る福井県の取り組みの進展を、今後も注視していきたい。

この記事は「VIEW21」高校版 2015年度10月号に掲載されたものです。

GTECは 英語教育の現場の課題を解決する スコア型英語テストです

英語教育現場でよく聞かれる悩み

英語の発信能力(書く、話す)は客観的な測定、指導が難しい

GTECは

Writing、Speakingの採点、添削は専門のトレーニングを受けた英語話者が、海外で行なっています。

中学、高校共通の指標がなく継続した指導ができない

GTECは

中高生に適した内容と難易度を設定。スコア型だから生徒の力の伸びを把握しやすく、継続した指導に適しています。

テスト結果を検証し、指導改善にまで結びつけたい

GTECは

試験結果をデータとして活用し、貴校の課題を特定。改善に結びつくプラン策定をサポートします。

高校生を対象としたGTECテストは2種類

【GTEC CBT】

- ・グローバル人材をめざす高校生向け
- ・大学入試で活用できる
- ・4技能を測定
- ・個人受験が可能

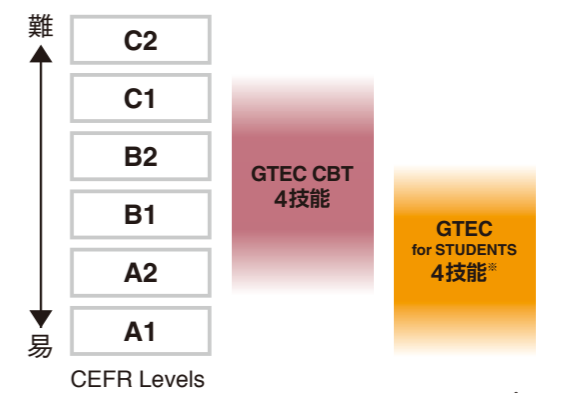
【GTEC for STUDENTS】

- ・中学・高校生向けのスコア型テスト
- ・3技能の測定に加え、Speakingを測るオプションテストも用意
- ・学校単位で受験

2つのテストは内容と難易度が異なります

GTEC for STUDENTS が日常的な英語力を測るための出題範囲になっているのに対し、GTEC CBT は大学の講義を英語で受講したり、英語の論文を書いたり読んだりする力を測るため、指導要領の範囲を超えた語い、表現を含む出題範囲を設定しています。そのため、GTEC for STUDENTS よりも GTEC CBT の方が難易度の高い出題レベルとなります。対応する CEFR レベルは右の表をご確認ください。

出題レベルのイメージ(CEFRのレベルと比較)



CEFRのレベル

A1	学習を始めたばかりの者・初学者	B2	実務に対応できる者・準上級者
A2	学習を継続中の者・初級者	C1	優れた言語運用能力を有する者・上級者
B1	習得しつつある者・中級者	C2	母語話者と遜色のない熟練者

図表 GTEC for STUDENTSとGTEC CBTのトータルスコア相関表

CEFR	A1						A2						B1			B2			C1~C2		
GTEC for STUDENTS	290	325	360	405	425	455	485	525	550	580	610	645	675	705	740	770	805				
GTEC CBT	400	450	500	550	600	650	700	750	800	850	900	950	1000	1050	1100	1150	1200	1250	1300	1350	1400

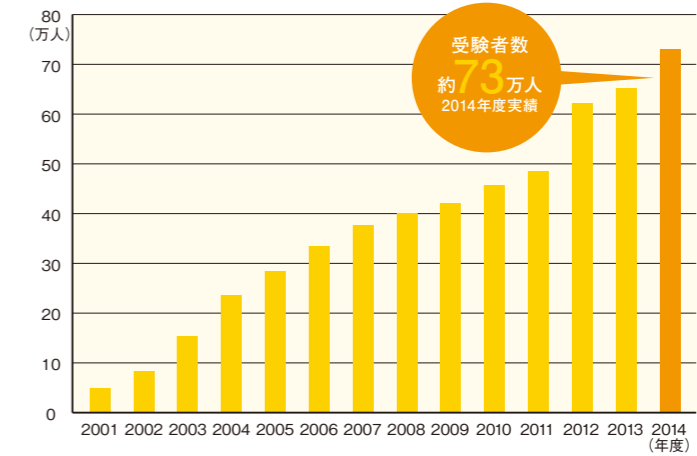
GTEC for STUDENTS

高校生が最も多く受検するスコア型英語テスト
入試に必要な英語力はもちろん、
留学後や就職後でも使える英語力を育む

活用実績(一例)

- ・受験者数 約73万人
- ・全国の1100校を超える高校で採用
- ・「東京都英語教育戦略会議」にて「英語力判定統一試験」として採択(2013年度)
- ・文部科学省「英語力を強化する指導改善の取組」事業の検証に採択(2012年度)
- ・約270校の大学・短期大学の一般・推薦・AO入試でスコアを活用

受験者数推移



特長

1 スコア型だから技能別の英語運用力を絶対評価

GTEC for STUDENTSは「聞く」「読む」「書く」の3技能を測るスコア型英語テスト。加えて「話す」をオプション受験することにより、4技能を測ることも可能です。
技能別の英語運用力を絶対評価で示しますので、受験者は自らの英語力の伸びを実感できます。

2 中高生の英語力測定に適した問題内容

高校生が授業で学ぶ英語が出題の中心。自分が登場人物になったつもりで問題に取り組み、テストを受けること自体が英語を使った生活体験に感じられるよう工夫されています。また、背景知識に左右されないように配慮されており、現在の英語力とその伸長がより正確にスコアに現れます。

3 効果的な指導をサポートする 教員用の帳票も送付

受験後は、生徒個人に返却するスコアレポート(個人別成績票)に加え、詳細な教師用帳票を送付します。これらを分析することにより、次のご指導・学習のポイントが明確になります。絶対評価のスコア型のテストであるため、英語科共通の議論の材料として活用できます。

4 生徒の学習意欲をアップさせる 答案のフィードバック

生徒のライティング答案は、研修を受けた採点者が海外で採点・添削しています。採点者から英語のコメントが付記されるので、生徒の学習意欲を高めます。また、生徒一人ひとりにCD付きの付属学習教材「STEP UP ノート」を提供。テストをきっかけに、より英語力を伸ばすことができます。

難易度は3つのタイプから選べます

	推奨学年	実施時間	上限スコア
Core	中2、中3	70分 ^{*1}	440点
Basic	高1、高2	90分 ^{*2}	660点
Advanced	高2、高3		810点

^{*1} Coreタイプは問題冊子がReadingで1冊(32分)、Listening、Writingで1冊(38分)となっており、分割実施が可能です。
^{*2} Advancedタイプ、Basicタイプは問題冊子がReadingで1冊(45分)、Listening・Writingで1冊(45分)となっており、分割実施が可能です。

■オプションでSpeakingテストもご用意
Speakingテストの実施時間は25分、スコア上限は170点です。

利用者の声

Comment

中3から高3まで、シラバスの到達目標に「GTEC for STUDENTS」のスコアを活用している。これからの日本の英語教育の到達目標になることを期待している。大学入試への対策にもなり、級の合否だけのテストでは見ることができない英語力の定着具合を確認し、指導に生かせる。

Comment

「GTEC for STUDENTS」は素材の内容・難易度が高校生にフィットしている。ライティングを海外で採点・添削してくれることや生徒の力の伸びを推移で見られるのが良い。

Comment

継続指導に最適。特にライティング指導の指標として活用できるのは、指標のない高校現場には大きな励みになる。

※GTEC for STUDENTSのサイトより抜粋

今後のご指導のポイントをわかりやすく掲載 GTEC for STUDENTSの 教師用帳票

学年の概況

受験結果の概況と課題の技能を把握する



成績概況

今回の成績のスコアとグレードを表示します。「前回の成績」「前年度生の成績」「全国平均」との比較も可能で、今後の指導の強化ポイントを把握できます。

トータルスコア成績分布

点数に応じて7つのグレードを設定し、各グレードにどれだけの人数が分布しているかを表示します。

トータルスコアの推移

GTEC for STUDENTSはスコア型テスト。絶対スコアで点数の伸びをグラフ表示しているため、生徒の力の伸びをひと目で把握できます。

3技能結果

3技能のバランスをチャートで表示。「前回の成績」「過年度生の成績」「全国平均」を重ねて比べることで、貴校の強みと弱みがひと目でわかります。

学年の技能別成績

課題克服に向けたポイントを確認する



グレードアップに向けて

貴校が各技能を伸ばすために効果的な活動についてのアドバイスを示しています。明日からの授業のご参考に活用いただけます。

パート・設問別正解率

結果はパートごとにも表示します。全国の正解率と比較することで、貴校において各技能を伸ばすべきポイントがわかります。

※画像はListeningの帳票です
※Writingはパート・設問別成績ではなく、「観点別採点結果」を表示します。

Readingの場合

WPM	前回	今回
130以上	0	3
120~	4	7
110~	5	5
100~	28	23
90~	34	46
80~	67	85
70~	80	69
60~	48	32
50~	4	5
50語未満	10	5
合計	280	280

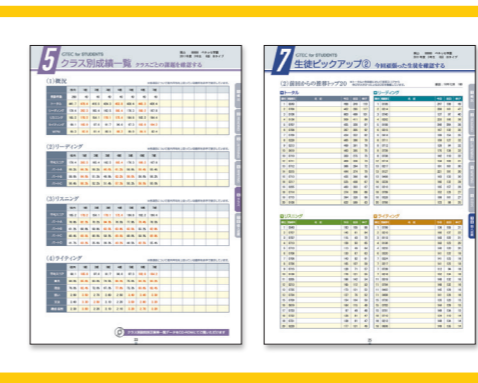
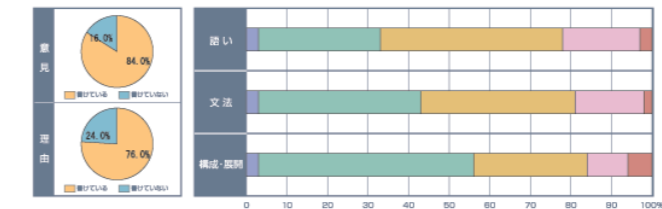
WPM分布

ReadingではWPM (words per minutes) も測定されます。貴校の生徒がどれくらいのスピードで英文を読むことができるのかをご確認ください。

Writingの場合

観点別採点結果

Writingの帳票では、スコア以外に5つの観点(「意見」「理由」「語法」「構成・展開」)別の結果も表示します。貴校がWriting力をさらに伸ばすために活用ください。



クラス別成績や頑張った生徒も把握できます。

帳票には全体および3技能の「クラス別成績一覧」も掲載。クラスごとの課題が把握できます。さらに、生徒の技能別トップ20、前回からの成績推移トップ20を別表にまとめているため、成績を伸ばしている生徒を発見し、声かけいただくことができます。

GTEC CBT

大学入試で活用できる4技能英語検定
 大学入学後やその先でも求められる英語力を測定できる
 「新しい時代の英語力検定」

GTEC for STUDENTSと比べ、高い英語力を測定アカデミックな語いが出題される

「CBT」とは、コンピュータの画面に問題を表示し、キーボードやマウスで解答を入力する試験のこと。「GTEC CBT」は新しい時代に適合した英語検定です。GTEC for STUDENTSと比べて、高い英語力まで測定できる内容となっています。

	GTEC CBT	GTEC for STUDENTS
測定技能	4技能	4技能*
受験形式	個人受験	学校単位で受験
実施形態(時間)	コンピュータ(約175分)	ペーパーテスト(約90分) タブレット
出題	日常生活に加え英語を用いた学習場面を想定したアカデミックな素材	日常生活での英語の使用を想定した出題

*Speakingはオプション

特長

1 海外留学志望者にも対応した語い・表現を出題

学習指導要領が求める語い・表現をもとに、その範囲を超える内容を含めた出題を行い、英語の運用力を測定。「大学生と教授の授業中のやり取り」「大学生同士のキャンパスでの会話」など、海外留学者が出会う場面を想定した語い、会話表現も内容に含まれます。

2 アカデミックな英語力の総合評価に適したしくみと難易度

GTEC CBTには、大学の講義を英語で「聞く」、英語の論文を「読む」「書く」など、アカデミックな場面を想定した語い、表現を含む問題が含まれます。また、4技能を均等バランスで評価するため、高校生のアカデミックな英語力を総合的に評価するのに適したテストといえます。

3 異なる回を受験しても信頼が高いスコア評価法

4技能の英語力を、スコア型の絶対評価で測定。スピーキングとライティングは、英語話者の視点による採点を行っています。検定は年に複数回実施しますが、異なる回を受験しても同じ尺度で比較ができるよう、「IRT(項目応答理論)」と呼ばれる統計処理をもとにスコアを算出しています。

4 外部試験を導入する大学が増加 大学入試に広く活用できる

日本の大学では、国際化に向けた入試改革が進んでいます。GTEC CBTは、大学入学後やその先のグローバルな進路において活用できる4技能の英語力が測定できるため、スコアを大学入試で活用する動きが生まれています。2015年7月現在、全国49大学の入試に導入が採択されています。

各技能を均等バランスで評価し、英語運用能力をスコア化

■テスト概要

測定技能	問題数	試験時間	満点スコア	解答方法	概要
Listening	約40問	約35分	350点	マウスクリック形式による選択	学生生活での会話や講義からの出題で、課題解決に必要な情報を「聞く力」を測定
Reading	約40問	約55分	350点	マウスクリック形式による選択	学生生活で遭遇する情報や、講義内容などの出題で「読む力」を測定
Speaking	7問	約20分	350点	マイク付きイヤホンでの音声録音による解答	会話応答力から自分の意見を述べる力まで幅広く「話す力」を測定
Writing	6問	約65分	350点	キーボードでのタイプ入力による解答	バリエーション豊かな出題で多角的に「書く力」を測定

大学入試に活用される理由

公平な受験機会

全国47都道府県に受験会場を用意し年3回の実施。「いかなる地域(エリア)・環境」の高校生においても、公平に受験機会を得られるような体制を取っています。

厳正な実施体制

CBT(Computer Based Testing)による全国一斉実施。本人確認や不正防止を徹底し、厳密な実施運営を行っています。

正確性の高い採点

クリック式ではないSpeakingとWritingにおいて、英語話者の専門採点官による厳密な採点を実施。受験者1名の解答について、複数名で採点を行い正確性を担保しています。

GTEC CBT を入試で 活用している大学一覧

※2015年10月時点で、大学発表の募集要項や、大学への調査を元に、弊社で確認が取れている大学を記載しています。
 ※各大学ごとに、GETC CBT を利用する入試方式に「○」を記載しています。
 ※必ず大学発表の資料でご確認ください。

2016年度入試から活用する大学(現高校3年生が受験)

設置区分	大学名	推薦AO	一般	設置区分	大学名	推薦AO	一般
国立	北海道教育大学	○		私立	中京大学	○	○
	千葉大学	○	○		愛知淑徳大学	○	
	東京大学	○			名城大学	○	
	東京海洋大学	○	○		名古屋外国語大学	○	
	鳥取大学	○			藤田保健衛生大学	○	
	九州大学	○			京都産業大学	○	
	長崎大学	○	○		同志社女子大学	○	
	大分大学	○			立命館大学		○
公立	首都大学東京	○			大阪女学院大学	○	○
	山口県立大学	○			関西大学	○	
	北九州市立大学	○			関西学院大学	○	○
私立	北海学園大学	○			近畿大学	○	
	共愛学園前橋国際大学	○	○		摂南大学	○	
	西武文理大学	○			神戸学院大学	○	
	麗澤大学	○	○		畿央大学	○	
	神田外語大学	○	○		西南学院大学	○	
	亜細亜大学	○		福岡大学	○		
	学習院大学	○		九州ルーテル学院大学	○		
	昭和女子大学	○		立命館アジア太平洋大学	○	○	
	専修大学	○					
	創価大学	○	○				
	玉川大学	○					
	大東文化大学	○					
	中央大学	○					
	東洋大学		○				
	獨協大学	○	○				
	武蔵野大学	○	○				
	桜美林大学	○	○				
	立教大学	○	○				
北陸大学	○						

2016年度以降の入試から活用する大学(現高校2年生が受験)

設置区分	大学名	推薦AO	一般	設置区分	大学名	推薦AO	一般
国立	北海道教育大学	○		私立	武蔵野大学	○	○
	筑波大学	○	○		明治大学	○	
	群馬大学	○			桜美林大学	○	○
	千葉大学	○	○		立教大学	○	○
	東京大学	○			金沢星稜大学	○	○
	東京海洋大学	○	○		北陸大学	○	
	金沢大学	○	○		中京大学	○	○
	鳥取大学	○			愛知淑徳大学	○	
	九州大学	○			名城大学	○	
	九州工業大学	○	○		名古屋外国語大学	○	
公立	長崎大学	○	○	藤田保健衛生大学	○		
	大分大学	○		京都産業大学	○		
	首都大学東京	○		同志社女子大学	○		
	山口県立大学	○		立命館大学		○	
	北九州市立大学	○		大阪女学院大学	○	○	
	私立	北海学園大学	○		関西大学	○	
		共愛学園前橋国際大学	○	○	関西学院大学	○	○
		西武文理大学	○		近畿大学	○	
		麗澤大学	○	○	摂南大学	○	
		神田外語大学	○	○	神戸学院大学	○	
亜細亜大学		○		畿央大学	○		
学習院大学		○		西南学院大学	○		
昭和女子大学		○		福岡大学	○		
専修大学		○		九州ルーテル学院大学	○		
創価大学		○	○	立命館アジア太平洋大学	○	○	
玉川大学	○						
大東文化大学	○						
中央大学	○						
東洋大学		○					
獨協大学	○	○					